

平成30年4月号～平成31年3月号掲載分

未来へつなぐ 復興への思い

子どもたちの
元気な明るい声と
復興の槌音が響く

この時期の復興に向けた主な動き

- H30. 4月 町内に「浪江町立なみえ創成小学校・中学校」が開校
- 4月 町内に「浪江町認定こども園 浪江にじいろこども園」が開園
- 4月 なみえ桜まつり花火大会
- 4月 県道50号（浪江三春線）の特別通過交通開始
- 6月 8年ぶりに「日山（天王山）の山開き」
- 6月 「福島いこいの村なみえ」が再開
- 7月 町内で8年ぶりに標葉郷野馬追祭
- 8月 国道399号（国道114号から帰還困難区域境（葛尾村方面））および国道459号（国道114号から帰還困難区域境（川俣町方面））の特別通過交通開始
- 8月 吉田数博氏が浪江町長に就任（昭和31年の合併以降 第17代・10人目）
- 8月 浪江消防署の本格運用開始
- 9月 町内で「ふたばワールド」（浪江町地域スポーツセンター）を開催
- 10月 浪江町イメージアップキャラクターに「うけどん」が就任
- 11月 「なみえ町民号」が復活（志戸平温泉と世界遺産平泉への旅）
- 11月 町内で大堀相馬焼「大せとまつり」が十日市祭と同時開催
- H31. 2月 「震災遺構検討委員会」が町に提言
- 3月 浪江町健康づくり総合計画を策定



日山（天王山）の山開き（6月）



浪江町イメージアップキャラクターに「うけどん」が就任（10月）



大堀相馬焼「大せとまつり」（11月）



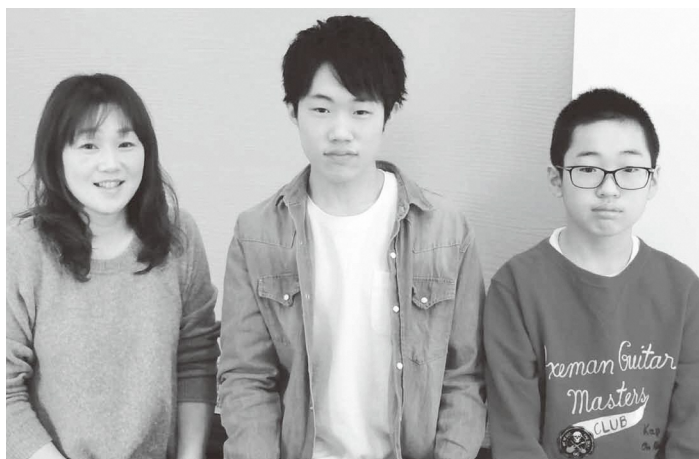
ふたばワールド2018 in なみえ（9月）



戸川 瑛道さん(藤橋)

取材者：認定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：2月17日 「平成30年4月 広報なみえ掲載」

僕は、浪江とこの体験を“歴史”にしたいくない。 伝えていきたい



▲左から、母の祥子さん、瑛道君、3歳違いの弟 翔瑛君

高校受験の真っ最中の取材にも関わらず、震災当時の様子や、各地に避難して後に一旦落ち着いた会津若松市の思い出、福島市に引っ越してから体験などを、時には母の祥子さんの記憶も借りながら、いろいろお話しくださいました。

目指す高校での新しい友人との出会いや、これからのご活躍を心から祈っています。

◆僕には、ふるさとが二つある

震災の時、僕は浪江小学校2年生で、地震が起きる直前まで遊んでいたと思います。保育園に行っていた弟の翔瑛は祖父が迎えに行きました。大熊町で教師をしていた母は、夕方学校を出ました。母が渋滞に巻き込まれ、帰宅したのは夜の9時過ぎで、家はいろんなものが倒れたり落ちたりしていたので、すぐそばにあった父の事務所に泊まりました。

翌朝5時頃から避難を呼び掛ける放送があり、母の実家のある南相馬市へ、それから郡山市の親戚宅、会津若松市、そして埼玉県

などを転々しました。母が勤務していた学校が会津若松市で再開することになり、僕たちは再び会津若松市へ戻り、市内の城西小学校に4月6日に転入しました。

会津若松は雪が凄くて、この世のものとは思えなかったけれど、積もった雪に寝転んだりして遊びました。城西小学校の同級生とはすぐに打ち解けたし、気が合いました。いろんなことを助けてくれて、本当に第二のふるさとみたいですね。高学年になる時にクラス替えがあったけれど、仲の良い友達はずっと一緒でした。スポーツ少年団で始めたバスケ、トボールの仲間にも恵まれました。

◆浪江のクラス会、したいな。成人式なら会えるかな

震災から1年余り後、リストナル猪苗代で浪江小学校の担任の先生や別れ別れになったクラスメイトとの再会の集いがありました。あれから浪江の友達とは会っていないので、みんなに会いたいですね。浪江小の思い出は外でよく遊んだことです。縄跳びやザリガニ釣り、蛍も見に行きました。城西小6年の時にバスケの県選抜に選ばれて、大会で白河のチームに入っていた浪江の友達と5年振りに再会したことが新聞に載ったりしました。

福島市に来て市立信陵中学校に入学しましたが、考え方が違っ

ていて戸惑うこともありました。僕は、会津若松や相馬にゆかりのある友達が多いから余計に感じるのかもしれないが、福島市はいろんな考え方をする人たちがたくさんいて、都会なんだなと思っています。

◆ベラルーシでの12日間は、貴重な経験

昨年8月、中学3年の夏休み、ベラルーシ共和国に行ってきた。隣国ウクライナでのチェルノブイリ原発事故によって多大な被害を受けたベラルーシの現状を学ぶ「ベラルーシ友好訪問団」を父の知人が主催していて、いわきや相馬など浜通りの高校生に交じって参加しました。ベラルーシでは子供からチェルノブイリ事故の体験者まで幅広い年代の方々の話を聞き、特に小さい子供たちにとって事故はすでに歴史の出来事になっていて、これを実感し、福島のことを伝えていかなければと思いました。

浪江の自宅は改装して泊まれるようになっていたので、父によく連れて行ってもらっています。浪江は自然や気候もいいし、海もあるから大好きです。会津若松市や福島市では体験できないこともたくさんあります。だから僕は将来、父の仕事（建設業）を継いで復興を支え、浪江町を有名にしたいと思っています。



宮崎県

佐藤 光琉さん(棚塩)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永・竹下

取材日：2月17日 「平成30年4月 広報なみえ掲載」

三年後、成人式で元気に会いましょう



伯母さんの嫁ぎ先である宮崎で避難生活を送る光琉さん。忘れることのない故郷・浪江と、今の生活の場・宮崎のことを、丁寧に言葉を選びながらお話しくださしました。



▲応援団長として凛々しい演舞姿
(光琉さんの通う高校の体育祭にて)

◆浪江での日々
浪江では幾世橋ドジャースというチームで、友達と野球をしていました。と言うより、野球を通じた友達との楽しい時間を過ごしていました。監督は「宿題が終わらないと練習には参加させない」という厳しきだったので、学校が終わると一目散に体育館の周りの土間に集まり、宿題を終わらせました。急ぐあまり下敷きも使わず、ブスブスとプリントに穴が空いたりしました。僕はもらったばかりの5番のユニフォームを着る日を楽

◆今の生活。そして、将来のこと
あのまま福島にいたら、住む家もなく大変だったでしょうから、宮崎に来てよかったと思います。ここに来るまでいろいろと大変なことがありましたが、今は生活にも慣れて快適な毎日です。震災の話題を避けることも、話すことでの気まずさもなくなりました。
高校生活はバスケットと応援団を兼部して、練習に明け暮れています。宮崎に来て野球に誘ってもらいましたが、野球をする気にはなれませんでした。

しみにしていましたが、大切な家とともに津波で流されてしまい、野球の思い出のものももう何も手元に残っていません。
当てもなく不安な気持ちのまま転々と避難している間も、キャッチボールをして遊んでいました。傍目には楽しそうに見えたかもしれないけれど、それでもしていないとやってられない気持ちだったんです。宮崎に行くとき聞いたときには、嫌だとか遠いとかは思わず、県内での避難所はとにかく寒かったのだな、とだけ思いました。

◆浪江への思い
浪江のことは「思い出す」というより、「忘れることはない」って感じます。野球を見てもそうだし、浪江の食べ物が出て何につけても、浮かんできます。やっぱり、友達に会いたいですね。でも、今の浪江では、会いたい人には会えないだろうし、自分の生活の場が宮崎になった以上、仕方がないというか、今は、それでいいと思います。大人になれば自由に福島へ行けるだろうし。
浪江のことは、月日が経てば少しずつ忘れられていくのかもしれないですね。だけど、一人でも多くの人にある震災とその後の僕たちを忘れずにいて欲しいので、機会があったら自分の言葉で話したいと思っています。

野球をしていたら、どこかで浪江の友達に会えたかもしれないけれど、あの時の僕は、ただただドジャースのみんなと野球がしたかった。
来年は受験生。世界史が好きなので、社会科の教師になる道を進むという選択も考えていますが、はつきりと決めているわけではありません。



柴 佳男さん・美江さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：1月31日 「平成30年4月 広報なみえ掲載」

南相馬でサークルが作れたらいいな

震災前は、柴油店を経営していた柴さんご夫妻。請戸のほとんどの住民の方とお付き合いがあったそうです。当時のお休みは月2回。精力的に事業を展開されていました。今だからこそ、地域の皆さんへ感謝の気持ちを伝えたいそうです。

現在は、南相馬市の新築したご自宅に娘さんと3人でお住まいです。浪江の家にあった庭石を自宅の玄関前に配置して、当時を懐かしんでおられます。



▲自宅の居間にて。
「南相馬にお越しの際は、ぜひご連絡ください！」
連絡先 090(2271)8861 (柴 佳男)

◆埼玉での「つながりカフェ」に感謝

美江さん 私たちは被災後、埼玉県に避難しました。そこでは「つながりカフェ」を実施してくださっていてよく参加しました。そのお陰で知り合いも増え、習い事や体験活動などを通してたくさん楽しませていただきました。

佳男さん 初めは、いわき市に着いてきたところです。その後、平成29年3月に南相馬市に移り住みました。当初は、ごみをどこにどう捨てるのか、町内会など区の仕組みがどうなっているのか、などが分からず苦労しました。間もなく1年を迎える今、ようやく落ち着いてきたところです。

自宅を構えようかと考えていたのですが、震災前に浪江で魚販売・加工を手掛けていた本家が南相馬市に移り住んだこともあり、手頃な物件を紹介してもらい住むことになりました。本家は車ですぐの距離なので、暮らしのことでいろいろと相談に乗ってもらい助かっています。周辺には、お店や病院があり、幹線道路も近いので暮らしやすいです。

◆のんびり暮らしたい

佳男さん 今、毎日しているのは散歩。約1時間10分歩き、合計9千歩になります。途中には愛宕神社があり160段もの石段があるんですよ。この散歩のお陰か、糖尿病の血中の数値が良くなりました。担当の医師も驚いているほどです。きつと精神的に落ち着いたことも効果があったのではないのでしょうか。

ほかには、庭木や植木を眺めるのが好きであちこち見に歩きます。ちょうど、自宅前のお宅のお庭が素晴らしく、交流しながら眺めさせてもらっています。

これからは、たまにスナップ写真を撮ったり、庭木や盆栽を見ながらのんびりしたり、気楽に過ごしていけたらいいなと思っています。趣味は特別な

のですが、人が好きで、知らない人と話してどんな人か理解するのも楽しいですね。

美江さん 南相馬に住んでからは、浪江町社会福祉協議会が実施する「お茶会」や原町の生涯学習センターで企画する「吊るし飾りの講座」に参加しています。また、月2回ダンベル体操にも通っています。このダンベル体操には、浪江町から南相馬に避難した住民の皆さんが集っています。南相馬に来たばかりの私たちにとても良くしてくださり、本当に感謝しています。

◆地域の方と仲良く

美江さん 最近考えているのは「手芸や編み物が好きな人が集まるサークルを作れたらいいな」ということです。被災者のサークル活動に助成金が出るということを聞いたりもしたので、なるべく参加者に経費がかからない形で実施できたらいいなと思っています。でも、まだ行動には移してはいませんが、一緒に南相馬でサークルを楽しみたいという方から連絡をいただければうれしいです。

これからずっと南相馬に住んでいくでしょう。だからこそ、地域の方々とは仲良く過ごせたらと思っています。



長崎県

中野 卓さん・フキ子さん(高瀬)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永

取材日：1月24日 「平成30年4月 広報なみえ掲載」

浪江への思い

長年連れ添った夫婦でも、思いはそれぞれ。「状況さえ整えば、浪江に戻って生活をしたい。」とおっしゃるフキ子さんと、「浪江に定住とは考えていないけれど、折に触れて足を運ぼう。」とお考えの卓さん。お二人のお気持ちを様々な角度からお聞かせいただきました。



▲フキ子さんのお誕生日にお子さまたちから贈られたコスモス畑の絵の前で、笑顔のお二人

◆先週、浪江町主催の交流会にご夫婦で参加されたそうですが、いかがでしたか

卓さん 初めてお会いする方もいらしたけれど、浪江という代には知らない同士だったのに、避難してから知り合って仲良しになった方もいます。

フキ子さん 役場の方に話を聞いて、町が徐々に復興し始めていることはよく分かりましたよ。でも、今はまだ、私が入りに帰れる場所ではないって感じました。

卓さん リフォームしたばかり

だった浪江の自宅は、解体して更地になりました。だから、今は帰るといっても帰る家さえないのが実情です。それで、交流会で「いこいの村にログハウス」と聞いて、浪江に帰る時、大いに利用したいと思いました。「何日かだけでも帰れる場所がある。」それだけで、ここでの今の生活も楽しくなるんじゃないですか。

◆楽しそうですね。お二人で計画されているんですか

フキ子さん 私は生まれも育ちも浪江。避難先である佐世保出身のお父さん(卓さん)の言っている「浪江に帰る」は、言葉は同じでも何かが違う、というのが正直なところ。仕事の都合で引っ越しているのなら、「ここは嫌、戻りたい。」とは言えないでしょうけど、この佐世保は避難場所。ここに避難しようと思ったのは確かに自分たちだけれど、やっぱりいつまでたっても違和感があるのよ。：とと言うより、年々、「ここは違うなあ。」と。

卓さん 私も佐世保出身といったって、浪江での生活のほうが長いんだから、仕事仲間も友人も浪江の方がずっと多いんだ

よ。だけど、お母さん(フキ子さん)にしてみれば、そうかもしれないね。今は、孫の学校の送迎を頑張ってくれているから、なかなか自分の時間もないけど、少し、何か体にいいことでもやってみたいだろう。

フキ子さん 私がここへ来たのは、娘と孫の力になるためだったんだな、と思うんです。だから、送迎も嫌ではないし。たまには、ちょっとお休みしたいとも思いますけどね(笑) 後2年すれば孫も高校卒業で、次女はお嫁に行くことが決まったし、カナダにいる三女には一人目の子供が生まれるから、楽しみがないわけではないのよ。

◆『2年後に浪江に帰ってみる』という目標を立てて、それまでに徐々に体を鍛えるというのはいかがですか

卓さん 私は震災直後に肺の手術をして今は障害者手帳を持っています。自分のペースでグラウンドゴルフを楽しんでいますよ。

フキ子さん そうね。健康でいるために、何か運動をして頑張ろうかしら。浪江に帰るため、って思えばね。



石川 康夫さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島
取材日：2月24日 「平成30年5月 広報なみえ掲載」

体が動く限り漁師を続け、 漁業で浪江を盛り上げたい



▲請戸とご自宅を行き来する毎日の石川さん。
南相馬・道の駅にて。

お父さんの代から請戸で漁業を営んできた第8康勝丸の船長・石川さん(62歳)。

会津や米沢で避難生活を送った後、南相馬市原町区に自宅を再建されました。

現在は試験操業を行いつつ、漁業協同組合の皆さんと共に浪江の漁業再生に向けて活動されています。

◆震災当時のこと

今も鮮明に覚えています。漁業組合の集まりに行く途中に地震が起き、家族を浪江の親戚の家に避難させ、私は船で沖に避難しました。誰も経験したことのない大津波でしたから、舵を取るのに必死で。あの状況では流された方を助けられなかったのは仕方がないと割り切っています。もしかしたら一人くらい助けられたんじゃないかと、やりきれない気持ちで思い返すこともあります。当日は沖に避難した16隻の船と一晩中、無線で連絡を取り合い、翌朝、全船が請戸の港に戻りました。そうしたら、何もなし。請戸漁港から歩いて5分の

場所にあった私の家も流され、一面がれきと水でした。

それから4年近く避難生活を送った後、両親が落ち着いて余生を過ごせるよう原町に家を建てました。でも本当は浪江に戻りたい。同じような事情で帰りたい方も帰れない方がたくさんおられるのではと思います。

◆漁業で浪江を盛り上げたい

今は試験操業で週1、2回漁に出ています。昨年2月に請戸漁港が再開し、26隻が帰還しました。震災前は小さい船も含めると100隻くらい。それには及びませんが、来年度の予算でもう2隻造船される予定で、「せめて30隻は」という当初の目標に近づいています。また、請戸漁港の市場も今年の4月頃に建設工事が着工する見通しです。浪江町も漁港の再開に力を入れてくれましたし、力を合わせて漁業を復興させることで、少しは町の力になれるんじゃないかと思っています。

現在、捕った魚は相馬に運び、放射能検査をした上で安全な魚を流通させていますが、ほとんどの魚種は国の定めた基準値を下回っています。元々、この辺の浜は時季ごとに捕れる魚の種類が多く、当たり前ですが、地場で水揚

げされた魚はスーパーで買う魚とは味が全然違います。ただ請戸は原発に一番近い港ということで、心配なのは風評被害。どのように払拭していくかを話し合っているところです。

◆若手の漁師も頑張っています

今年1月2日には震災後初めて、出初式を行いました。若野神社の沖合でお神酒をささげ、安全と大漁をお祈りするという伝統的な儀式です。また震災前には安波祭といって、漁業組合の青年部が神輿を担いで海に入るといって祭りを毎年2月の第3日曜日に行っていました。私も昔は若さに任せて海に飛び込んだものです。若野神社も津波で流されましたが、いずれ社を再建していただけたらと願っています。

どの地域も後継者不足の問題がありますが、請戸は若い漁師も頑張ってくれています。30代、40代、50代も頑張っているし、一番の若手は20代。分からないことは我々が教えるし、逆に教えられることもあります。漁師というのは大体みんな負けん気が強く、沖に出ればライバルだけど、団結心はすごく強い。青年部が頑張っているから、我々も頑張ろうと思えるんです。



よしみ かい
淑美会

根岸 淑子さん(立野)・鈴木ミキ工さん(川添)
柴 夕ケ子さん(請戸)・落合 正由さん(請戸)
紺野 邦子さん(棚塩)・川崎 貫正さん(幾世橋)
安倍 義忠さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：3月17日 「平成30年6月 広報なみえ掲載」

集まって、しゃべって、歌って、運動して！
淑美会は、皆さんの心と健康を支えたい



▲月1回の淑美会に集った方々（3月17日午前撮影）

取材に伺った日は月1回の「みんなのカラオケお茶っ会」の活動日でした。浪江町地域スポーツセンターに歌声と笑い声が響いていました。

「誰でも大歓迎。一緒に楽しい時間を過ごしましょう」と、浪江町地域スポーツセンターを訪れる人々にも声を掛ける会主の根岸さん。浪江に戻った方も、近隣から駆けつけた方も和気あいあいと、思い思いに楽しんでいらっしました。

今回は淑美会のメンバー7名に集まっていたいただき、お話を伺いました。

◆どのような活動グループなのか、教えてください

根岸さん（淑美会会主）もともとはカラオケが中心の会でしたが、今では避難されている方、そして浪江町に帰られた方々の心の支えになれたらという考えの下に、活動を続けています。

さらに、南相馬市などのデイサービスや特別養護老人施設などを訪問し、ボランティア活動も行っています。施設入居者の皆さまも一緒になって歌ったり、踊れたりできるプログラム内容に努め、最後に握手をして別れますが、涙を流しながら「また来てくださいね」と手を握られると、メンバーも心を打たれ、練習に力が入るようです。

また、年に一度、研修を兼ねた慰安旅行（2泊3日）も行っており、これまで那須塩原、土湯野地温泉など送迎付きのリーズナブルな宿泊先を探して楽しんでいます。今年は7月初旬を予定しており、ご連絡いただければどなたでも参加できます。

◆皆さんの得意のジャンルをお聞かせください

鈴木さん 演歌や懐メロです。

柴さん 演歌や歌謡曲ですね。

落合さん 演歌。最近は、福田こうへいの曲をよく歌っています。

紺野さん 演歌や歌謡曲が大好きです。

川崎さん 3か月前に入会しま

した。浪江に住んでいるので、浪江町地域スポーツセンターの予約や申請手続を手伝っています。

安倍さん ぼけ防止にカラオケをやっています。覚えが悪いのが難点かな。

◆皆さんの日頃の暮らしぶり、会との関わりなどを聞かせてください

安倍さん あちこちに避難しましたが、浪江の生活が忘れられなくて「避難指示解除になっ

てきませんでした。でも、親戚や隣近所はいなくて、イノシシやアライグマばかり。頭が狂ってしまうとさえ思いましたね。きつと、浪江へではなく、昔の生活に戻りたかつたんだよね。今はあんなに帰りがたかつた気持ちとは全然違います。町がすぐに暮らしやすくなるとは思えないし、あと2、3歳若けりゃいいのかもしれないが、一日ごとに年を取りますのでね、どうしようかと迷っています。だから、帰ってこない人の気持ちもよく分かりますよ。

川崎さん 僕は仕事で広島に住んでいましたが、震災前に浪江町に戻りました。亡くなった妻が川添の出身だったものですから、こちらに住むことにして、新居が震災の3か月前に完成していました。震災後、避難して川俣町や福島市、南相馬市鹿島



▲柴さん



▲鈴木さん



▲根岸さん



▲紺野さん



▲落合さん



▲安倍さん



▲川崎さん



▲グループインタビューの風景

区の仮設住宅を経て、戻りました。一人暮らしをしていたら、浪江町社会福祉協議会にこの会を紹介され、問い合わせました。だから、外に出るようになったのは会がきっかけです。

鈴木さん 避難先だった埼玉から南相馬市原町区に移った時に誰も知っていない人がいなくて心細く、根岸さんに電話しました。点在する借上げ住宅の人たちは「集まる場所がない、淋しい」と言っていたので、借上げ住宅自治会「なみえ相双会」を4、5人で立ち上げ、会員として一緒に活動を始めました。会員は約300人、役員は7人、ほかに連絡員10名ほどがいました。新年には「ミニ芸能祭」、花見や芋煮会もやりました。最初、なみえ相双会の催しは、原町区の喫茶「いこい」から始まり、南相馬市立中央図書館を借りていたのですが、南相馬市社会福祉協議会の計らいで視聴覚

室をお借りして4年間活動を続けることができました。

根岸さん 淑美会の「母」みたいな存在ですよ。

柴さん 私は、鈴木さんから誘われて入会しました。実は、お互い請戸小・中学校の同級生なんです。原町教室やこのお茶会に参加するようになりました。地域の人たちとぼったりと再会して電話番号を交換することも

あります。自分で体を守ろうと、腰が少しくらい痛くても、お茶会や体操には通っています。

落合さん もともと妻が自治会の連絡員をしており、慰安旅行に同行した時に、カラオケが楽しかったので、帰って来てから私も淑美会に入会しました。

紺野さん 富山などに避難した後、福島に戻り、南相馬市原町区の八方向仮設住宅に3年いました。仮設でなみえ相双会と一緒に芋煮会を2回開催した時に根岸さんと知り合いになり、夫が2年くらい先に淑美会のメンバーになったんです。その後、私も入会しました。これからでもできる限り、ボランティアに参加していこうと思います。

根岸さん 仮設住宅や借上げ住宅に避難している人たちが孤立し、悩んでいる人たちが多かったので、笑顔になれるようにと思い、ボランティア活動を始めました。

◆最後に、皆さんから一言、コメントをお聞かせください

落合さん 6月17日の復興祭がとても楽しみです。「ゆめはつと」のステージで歌うのは、本当に気持ちがいいんですよ。

紺野さん 以前は鼻歌程度だったのが、今は歌うことが楽しみになりました。

柴さん 皆さんに支えていただきながら、参加を続けたいと思っています。

川崎さん 体をかばいながら、楽しみます。

鈴木さん 会が続く限り、楽しみに参加します。

根岸さん 一人一人の事情は違うけれども、みんなで一緒に楽しんでいきたいです。一人で考え込む時間は少ない方がいいいんですから、ね。みんなと力を合わせて笑顔を取り戻していきます。

淑美会 「唄・舞・楽の共演復興祭」

- 6月17日(日)
南相馬市文化会館「ゆめはつと」
- 9時30分開演／無料

今年で4回目。ぜひ、私たちの日頃の成果を見に来てください！そして、仲間になってください。

(問合せ・連絡先)
根岸淑子 TEL 090(6781)6003

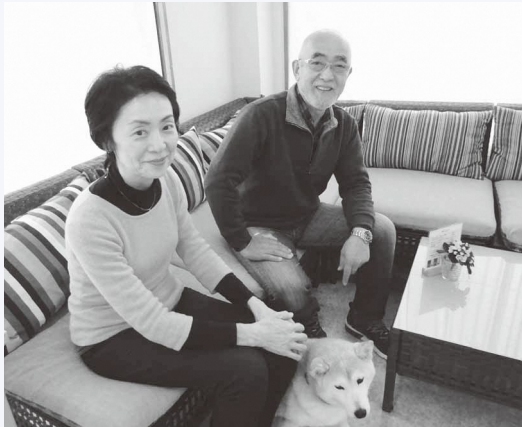


亀田 和弘さん・玲子さん(楯渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 銅嶋

取材日：3月19日 「平成30年6月 広報なみえ掲載」

落ち込むよりは、前を向いて生きていきたい



▲亀田さんご夫婦と愛犬ゆず



▲料理教室風景

4年前、和弘さんが浪江町復興支援員の仕事に就いて半年たった頃に、借上げ住宅で取材を受けてくださった亀田さんご夫婦。

避難先の佐倉市で土地を求め暮らしていくことを決めました。

和弘さん 以前、取材を受けた時は、義父と娘と私たち夫婦の4人で借上げ住宅に暮らしていました。一昨年、京成本線志津駅から10分の場所に土地を購入、家を建てました。その後、義父が亡くなり、娘も仕事の関係で会社の寮に移り、今は夫婦二人と愛犬ゆず(15歳)とで元気に暮らしています。息子夫婦と孫たちは、ここから車で1時間ほどの所に住んでいます。娘もこの秋には、結婚の予定です。

昨年、福島県の仮設住宅で暮らしていた父を千葉に連れてきました。一年がたち、やっとこちらの生活にも慣れてきたようです。父も私も浪江町で生まれ育ち、町への思いはあります。しかし、6年の避難生活は長く、その間に、こちらでの皆さんとの交流も深まり、千葉に家を求め住むことを決めました。父も初めは帰りたいと言っていました。浪江の家も取り壊しましたが、自分も高齢のため戻って生活するのは諦めたようです。それでも、浪江にはお墓と義父が震災前に建てたばかりの家があるので、お盆やお彼岸、お正月には父を連れて浪江に帰り、その家に泊まっています。

千葉に避難し、3年間は造園会社でアルバイト。その後、縁あって復興支援員になって4年。もともと人と話すことは好きだったので楽しく仕事ができます。自分も同じ町民だから、みんなが困っていること、これが必要とされること、これが分かるので、役場と町民の橋渡し役を担えればと思います。依頼を受けて、震災前の様子、避難先での暮らしや浪江町民の今の状況、自分の思いを一般の人たちに話す機会があります。避難先での町民の暮らしを同じ町民として支援できればと思っています。

玲子さん 震災前から行っていた「タッパーウェア料理教室、みそ作り教室」を避難直後から、千葉県近郊、福島県内各地、つくば市で行っています。以前からの生徒さんたちは「避難先での暮らしの中、みんなが料理を作り、おしゃべりして食べるのは楽しい！」と言ってくれます。東京出身ということもあって、移動には電車やバスを利用しますが、待っていてくれる人がいると思うと苦になりません。避難先の佐倉市では、パン教室、洋裁やガーデニング、寄せ植えなどのサークルに入って、たくさんの仲間ができました。ご縁が広がって、今では佐倉市を中心に県内各地で、料理講習、ボランティアクッキングなどを開催しています。

「落ち込むよりは前を向いて生きていきたい」物は失っても健康でいられればと思います。常磐線が浪江まで開通したら、もっと気軽に相双地域の仲間たちと会いに行けると思います。古くからの友人と気軽におしゃべりするだけで元気になります。福島と千葉の行き来を続けることになりませんが、友人たちとのつながりと自分たちの暮らしを大事にしていければと思います。お近くの方、ぜひお越しください！



福島県

安齋 政夫さん・チ工子さん(両竹)

取材者：特定非営利活動法人寺子屋方丈舎 江川

取材日：平成29年11月20日 「平成30年7月 広報なみえ掲載」

今を大切に生きる



▲政夫さんとチ工子さん ご自宅玄関前で

いわき市内に自宅を新築されて5年。
夫婦二人で、体と心の満足を大事にしながら「さみしさもエネルギーに」変えて元気に楽しく毎日暮らしていっています。

◆不安な中でも決断を早く

政夫さん 若い頃から漁師として、北洋の豊かな海で船に乗って働いていました。漁師の仕事は、とても厳しかったですが、仲間にも恵まれ楽しく仕事をしていました。

チ工子さん

私は、双葉町の生まれです。昭和38年に結婚をして、二人の娘にも恵まれ、幸せに暮らしていました。

政夫さん

自宅があったのは、原発から6キロメートル余り離れたところでした。東日本大震災当日は、地震が起きた後、町の防災無線を聞き避難することを決めました。

請戸は遠浅で、津波が来ないと言われていたんだけれど、とにかく、親戚と一緒に行政の指示に従って、サンシャイン浪江へと避難しました。翌3月12日朝には、津島経由で福島市まで避難しました。その後、二本松市内のアパートに落ち着いて避難生活を続けま

した。請戸の家は全損。残念だけれども、もう請戸には戻れない。幸い、子供たちも独立して暮らしている。「小さくてもいいから家を建てて残りの人生を暮らしたい」と夫婦で相談をし、いわき市内に家を建てました。震災から2年後のことです。それからもう5年たちま

◆人の役に立つことが大好き

政夫さん 私は、体を動かして働くのが大好きです。77歳の今も、時々、植木屋の仕事をしています。忙しいときは週2〜4日働きます。誰かに喜んでもらうことが嬉しくて、今でも近所で簡単な庭木の手入れをしているんです。

震災後は、親戚付き合いだけでなく、ご近所のお互い様の関係もとても大事にしています。避難先の二本松でも夫婦で卓球や、踊り、温泉通いを楽しみました。いわきに来てからは「男の料理教室」にも参加し、友達のを広げています。皆さん60〜70歳代ですが、知らない土地で

も積極的に参加すれば受け入れもできるし、そこでは人の輪もできます。人も樹木も根付くことで元気になれるんですね。

◆健康こそが何よりも大切

チ工子さん 夫婦で楽しむのは、家庭菜園と週2回の卓球です。庭の野菜も季節ごとに豊かな実りを与えてくれます。動けるうちは、自分たちのことは自分たちでやって、できるだけ体を動かしたいです。大変なことはありませんでしたが、自分の気持ちを塞がないように暮らしています。

政夫さん

時折は、庭木の手入れの仕事で、浪江の町にも自分で車を運転して向かいます。どこにいても、思い出のたくさんある浪江町のことは深く心に残っています。



▲大好きなカラオケで歌う政夫さん



福島県

佐藤 のぞみ 希さん(棚塩)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：6月3日 「平成30年8月 広報なみえ掲載」

避難中、多くの人に助けってもらった 恩返しができれば

震災発生時、小学校2年生（8歳）だった佐藤さんは、今春から高校1年生。震災後は7回の引っ越しを余儀なくされましたが、現在はいわき市内に建てた自宅でご家族と共に元気にお暮らしです。避難中のご苦労についてはあまり語らず、「たくさんの人に助けってもらった」「友達が増えた」と話す満面の笑顔が印象的でした。

◆高校では弓道に熱中

高校では弓道部に所属しています。きつかけは、部活紹介で先輩たちが弓を引く姿を見てかっこいいなと思ったからです。弓は、*「神様の道具」*と考えられていて、弓を引く前の一連の動作には一つ一つ意味があることなどを先輩から教わって、ますます興味が湧いてきました。

今はまだ弓を持たずに、腕の伸ばし方や肩の骨の入れ方といった基本を丁寧に教えてもらっています。平日はほぼ毎日練習、大会の前などは土日も練習があって、忙しいけれど楽しいです。先輩たちが結構強いので、そういう伝統を私も引き継げるようになれたらなと思って練習を頑張っています。

将来のことはまだ具体的にないけれど、高校を卒業した

ら大学に進学して将来の職業を選択する幅を広げ、何か人の役に立てるような仕事に就けたらいいなと思います。

◆悪いことばかりではなかった 避難生活

震災が起きた時、私は小学校2年生でした。避難先の新潟と日立市の小学校に通い、中学校に入学する時にいわき市勿来町に引っ越ししてきました。母の話では震災後、計7回引っ越したとか。私としては避難先で親しくなった友達と別れるのが一番つらかったかな。でも悪いことばかりではなかったと思います。もし震災がなかったらここには住んでいなかったでしょうし、ここに住んでいなければ今仲のいい友人たちとも知り合えなかったです。今でも、新潟の避難所にいた時に親切にしてくれた女の子とは連絡を取り合ったり、たまに会ったりしています。

浪江時代の友人とも結構仲良くしています。夏休みに遊びに来てくれる子もいるし、去年11月に行われた十日市祭では久しぶりに幼なじみたちと再会しました。みんな同じような経験をしているから、なかなか会えなくても心が通じ合える気がします。

◆震災前のような明るい浪江に

浪江の自宅はそのまま残っているのですが、週末、たまに母と一緒に浪江に戻ります。家に行く途中、小学校や昔よく遊んだ場所に寄ってもらって、懐かしいねえ～みたいな。小学校の校舎の外観は私が通っていた頃と変わっていないんです。でも、校庭はがらんとして雑草が生えたり、また新しくお花が植えてあったり。7年間ってあつという間ですね。

浪江の自宅の近所には週末だけ浪江で過ごすという人も結構います。うちも片付けやクリーニングをしている最中で、母は、たまに帰ったり親戚の人が浪江に行ったりする時に使ってもらえたらいいね」と話しています。まだ時間はかかるでしょうが、だんだん震災前みたいな明るい浪江になったらいいなと思います。

それから私たちのような経験をしたことのない人の方が多いと思うので、この先大きな災害があった時、*「こういう場合はこういうふうにと動く」といって*と周りの人に伝えるなり自分自身が動くことで、あの時の経験がちよっとでも役に立ったらと。避難先でたくさんの人に助けられていたので、恩返しができると思います。



▲ご自宅の庭にて、佐藤さん



福島県

氏家 美智子さん(津島)

取材者：バーグ・プラン研究室 深田

取材日：7月12日 「平成30年9月 広報なみえ掲載」

多くの人たちとの出会いに支えられて、 今の私たちがあります



▲氏家さん ご自宅玄関前で

二本松市針道では、今年も「中島の地藏桜」観桜会が行われました。針道で5年間避難生活を送った氏家さんは毎年参加され、地域の方々との交流を続けていらっしゃいます。現在は、同市安達地区に家を建てられ、新たな暮らしを始められて3年目を迎えます。そんな氏家さんに、針道との関わりや現在の暮らしぶりについてお聞きしました。

◆今年も観桜会に参加

二本松市針道の「中島の地藏桜」観桜会が、つぼみが膨らんできた地藏桜近くのさくら広場で盛大に行われ、招待された私たち夫婦も針道に避難していた浪江町民と共に参加しました。今年は、4年前に私たち夫婦で寄贈したしだれ桜が初めてきれいな色の花を咲かせ感激しました。

◆針道での避難生活

浪江町津島で農業をしていた私たち夫婦は、震災直後、寒さを防ぐ布団だけを持って長男夫婦とその孫2人の家族6人で二本松市に避難しました。

主人の性格が大変繊細で気を使い過ぎることから、仮設住宅での避難生活は無理と考え、息子がネットで見つけて移り住んだのが針道の「佐勢ノ宮団地」でした。私たち家族はここで、その後5年間を過ごしました。

た。この間、地区の方々には温かく迎え入れてもらい、焼肉会やカラオケ、バーベキュー大会等に誘っていただくなど、いつの間にか親しく飲み合う間柄になっていました。私たちは、こうしたご恩に

何かお礼したいと事務局の方に相談し、桜の苗木を寄贈しました。

◆安達での新たな暮らし

現在は、二本松市安達地区に、息子家族との二世帯住宅を建て、新たな暮らしを始めて3年目になります。近くに農家の知り合いもできたことから、家の周りに畑を借りてジャガイモなどの野菜作りや花作りを始めました。何より一番良かったことは、ふさがちだった主人が週3回、近くの体育館で仲間と卓球を楽しむなど社交的になったことで、今は夫も私も地区サポートセンターの催しに参加し、団地に住む浪江町の人たちや地域の新しい友達と共に楽しんでいきます。

◆故郷津島の現状

避難中は、置いてきた飼い犬に餌をやり定期的に帰っては掃除や草刈りをしていましたので、家・屋敷は比較的きれいな状態です。また、今年の春先は暑かったせいか、家の周りの桜や梅を始めいろんな花が一斉に咲き誇りきれいでした。

しかし、津島に帰っても人や車を見かけることはほとんど無くて寂しい気持ちになります。実家があるうちは、時々帰っては草刈りや掃除を続けたいと思っていますが、私たちではどうにもならないイノシシ対策や家の前の道路の側溝にたまった

土砂や流木の撤去に困っています。

◆孫たちの成長が楽しみ

孫は専門学生(男)と高校生(女)になりました。

上の孫はカヌーにはまり、中学生の時には全国大会で5位入賞、高校生になってからも、さらに本格的なトレーニングを頑張っていました。下の孫は運動会ではいつもリレー選手。走っている時の写真はどれも笑顔で写っていて走ることが大好きな明るい子で、今は高校の陸上部に入っています。2人とも打ち込むものがあって、仲間や友達がいて、元気に、日々成長してくれているのが何よりです。

◆多くの方々との出会いに感謝

大変な避難生活の中でも私たちが恵まれていたと思うことは、家族一緒に避難生活ができたことです。針道では同じ団地で、今はこの二本松市安達地区内で一緒に住み、孫たちともいつでも会うことができます。

もう一つは、避難先々で多くの方々との出会い、支えられたことです。地域の方々や避難先で出会った浪江の方々、郷里の友人や仲間たちなどいい方々に恵まれ、その励みがあったから今の私たちがいることに感謝するとともに、今後もこれらの方々との絆を大切にしていきたいです。



門馬 文雄さん・けい子さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津

取材日：7月18日 [平成30年9月 広報なみえ掲載]

明日どうなるかなんて分からないから、普通に暮らせればそれでいい



▲ご自宅居間にて、文雄さんが手にしているのはカラオケ大会入賞でもらった盾

いわき市の復興公営住宅に暮らす文雄さん・けい子さんご夫妻。2年前に福島市内の仮設住宅から移り住みました。

ここでの生活は、支援団体などのお陰もあり不自由なく充実しているとのことですが、どこか落ち着かない気持ちも抱えていらっしやいます。

◆浜通りの気候が合っています

2人とも浪江町で生まれ育ちました。3月11日の震災発災後は福島県内の避難所を転々とした後、娘のいる北海道の帯広に行きました。帯広では、かつて三菱自動車の寮だったところを貸していただき、8月まで滞在しました。現地の役場の方にも大変よくしていただき、このままここに任んではどうかと言われましたが、福島に母を残してきていたこともあり、そういうわけにはいかないと、戻ることにしました。その後は、福島市内の仮設住宅に数年暮らし、2年前の春に、現在暮らしているいわき市の復興公営住宅に移りました。

ここは買物の便もよく、

集会所で週2回のカラオケやコーヒータムがあったり、支援団体が企画するイベントや日帰り旅行などもあるのです。屈せず暮らしています。浪江町では海の近くに暮らしていますが、今も海の

近くなので気候が似ていて、やっぱり落ち着きます。福島市では雪が多くて、冬は毎日雪かきをしなくてはならなかったし、雪道の運転が怖かった。夏も、海風がない内陸の暑さがこたえました。いわきに移って、やはり浜通りが合っているなと思っています。

◆カラオケ大会に参加

去年、NPO法人みんぶくの企画でいわき市内の復興公営住宅対抗のカラオケ大会がありました。私はこの団地の代表として出場し、「対馬海峡」を歌って審査員特別賞を受賞しました。

同じ団地に住む人たちが30、40人くらい応援団として駆け付けてくれて、応援用のうちわを作ってくれて、応援の賞もあるのですが、うちよりも大きなうちわを作ったところが表彰されていました。応援団の人数はこちらの方が多かったのですが、うちわの大きさを負けてしまいました(笑)。

カラオケは浪江町に住んでいる時からやっていて、町のカラオケ大会に出たこともあります。福島市にいた時も、浪江町の友人と5、6人でカラオケ大会に出たりしていました。これからも楽しく続けたいと思います。

◆時の流れに身を任せて

今はここで不自由なく暮ら

しています。ずっとここに暮らすつもりかというとはっきりとは決められていません。

浪江町ではずっと持ち家の一軒家だったので、団地住まいにはなんとなく慣れません。以前は畑も持っていました。今は土いじりが自由にできないのが残念です。中古住宅を探したりもしているのですが、なかなか思うようなところは見つからないものですね。浪江町は育った所なので愛着もありますし、戻りたい気持ちもありますが、家族の意見がなかなかまとまりません。郡山に家を建てた長男が「来たら」とも言ってくれませんが、私たちが使える部屋は一つしかないのです。まだここで自由にしたい気持ちがあります。いろいろ考えると心を決めることができず、ここで暮らしながら時の流れに身を任せるしかないかなと思っています。

被災して最初の頃はご飯を思うように食べられず、一つのカップラーメンを3、4人で食べたり、少したつてもおにぎりと漬物だけだったりしました。それを思えば、今は幸せです。郡山の孫たちも時々遊びに来てくれます。先がどうなるか分かりませんが、普通に暮らすことができればそれでいいと思っています。



戸川 謙一さん(川添)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：7月21日 [平成30年10月 広報なみえ掲載]

この川俣町と、ふるさと浪江町の懸け橋になりたい

避難生活を送ってきた川俣町山木屋地区の人たちと自治体や国とをつなぐ仕事に取り組む戸川さんは、「避難指示解除後のこれからが“正念場”。川俣も浪江も一緒ですよ。山木屋900人ではなく、一人一人、(1/900ではなく) 1/1人の暮らしへの要望や不安などの声を拾い、丹念に伝えることが私の役目だと思っています。」とおっしゃっていました。



◆川俣町に避難。以後、暮らしも仕事もそのご縁です

震災当日は、東京電力第一原子力発電所の事務本館に滞在していました。最初はプラント事故かと思いましたが1号機は何事もなく、退社したものの道路は大渋滞。徒歩で帰りました。自宅はさほど被害も無く、家族も無事でしたが、翌朝は避難を呼び掛けるサインで起こされました。津島に向かったものの、すでにこの避難所も満杯で、川俣町立川俣南小学校に約10日間。その後、おじまふるさと交流館に夏までいました。当時一緒だった浪江町10世帯と南相馬市4世帯など主な世帯は、川俣町が管理する中山工業団地急仮設住宅に入居することになりました。

避難した当初、通勤がままならないこともあり職場を退職しましたが、川俣町原子力災害対策室（現在は原子力災害対策課）で絆づくり支援員となり、放射線や放射能測定業務に就きました。仮設住宅では自治会長も務めました。川俣町の職員さんが常に近くにいたので、住民の要望や提案などは伝えやすかったですね。

平成28年11月に、復興公営住宅壁沢団地に転居し、平成30年4月からは復興庁の市町村応援職員として、以前と同じ部署

で生活相談員として勤務しています。

◆浪江出身と伝えることで、心の垣根を超えています

川俣町の一部避難地区となった山木屋の方々に訪問し、暮らしの様子や放射線への不安、帰還に関する相談などを行っています。山木屋と浪江は隣同士ですから、昔から往来があつて縁が深いんです。ですから、訪ねて自己紹介をする時、真っ先に浪江町出身と伝えると一気に打ち解けたり、逆に励まされたり、お気遣いいただくこともあります。

平成29年7月1日、国道114号沿いに復興拠点商業施設「とんやの郷」がオープンしました。山木屋の人たちはもちろんですが、浪江町を始め、中通りと浜通りを行き交う人たちにもどんどん活用していただきたいんです。私にとっても、ここは浪江とつながる重要拠点であり、希望の場です。

町では、この施設が地区のにぎわいを復活させ、帰還を促す足掛かりの場として大きな期待を寄せています。お蔭さまで、利用者は予想より早く5万人を超えましたが、まだまだご存じない方も多いようですから、利用者数の増加を図るにはイベントや折々のPRなど周知活動が鍵になるかと思っています。

◆いつか浪江に。子供たちの成長と仕事が今は優先ですね
うちには子供が3人おります

が、一番上は就職し、2番目と3番目は来春、大学と高校進学です。私の仕事もありますから、当分は川俣町にお世話になります。

妻と2人になり、浪江町にこれまでの経験を生かせるような仕事があるようでしたら、いつかは言えませんが、戻ることができたらいいですね。



▲利用促進の仕掛けの一つである「食品検査」販売目的以外の食品の持込みは約10分で測れます。平成30年2月から、どなたでも利用できるようになりました。
受付：情報発信コーナー（平日10時～16時30分）※最終持込みは16時10分まで



▲山木屋地区復興拠点商業施設「とんやの郷」浪江にお越しの際は、休憩、お買物やお食事に、ぜひご利用ください。
トイレは24時間利用できます。お買物は10時から18時まで、お食事処（定休日：日曜日）は11時から14時までです。



今野 満里実さん(南津島)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島

取材日：8月11日 「平成30年10月 広報なみえ掲載」

ふるさと・津島の伝統芸能を継承し、次の世代につなげたい



▲平日は役場の仕事でお忙しい今野さん。白河駅にて。

津島で生まれ育った今野さんは、二本松市の高校を卒業後、短期大学と専門学校を卒業し、西白河郡中島村役場に就職しました。

現在は仕事に邁進しつつ、ふるさとの伝統芸能を継承しようと「津島の田植踊」の早乙女役の振り付けを習得。今年1月には二本松市で開催された発表会で早乙女役を踊り、好評を博しました。

◆役場勤めの苦労や楽しさ

今年の4月から中島村役場に勤めさせてもらっています。建設課で上下水道関連と公営住宅の担当をしています。まだまだ分からないことだらけで、一つ一つ先輩方に教えています。事務的な仕事をしながら現場のことを学ばせていただいているので、大変なこともありませんが、村民の方に「ありがとう」と言ってもらえると本当にうれしくて、もっと頑張ろうと思っています。

役場の一員として地域に関わるようになってから、もの見方が随分変わりました。震災後、一町民としては、役場の方ももっとこうしてくれたら、と思うことも正直ありましたが、今は感謝の気持ちしかありません。次々に問題が発生する中、限られた人数で対応してくだ

さったのは想像を絶するほど大変だったろうと思います。

◆ふるさと再生への思い

震災が起きた年は、私は憧れていた南相馬市の高校に進学し、4月からの高校生活を楽しみにしていました。けれど震災が起き、福島市、それから岩手県の親戚宅に避難した後、5月から二本松市内の高校に転校したんです。転校してからは周りの人に支えてもらい、大好きな友人もできたので、今ではこういう道も良かったんだなと思っています。けれど避難直後はすごく無気力になってしまったことがありました。ただ、ある日津島の中学校を訪ねたら「卒業おめでとう」というお祝いの掲示がそのまま残っていて、それを見た時、自分も地域のために何かできないかなと強く思いました。

津島は山林が多い地域ですから、森林について学んだら何か役に立てるかもしれないと思い、神奈川県立短期大学に進学したんです。私のリサーチ不足で、想像していたようなカリキュラムではなかったんですが、短期大学の先生に「公務員という道もあるよ」とアドバイスをいただいたのがきっかけで専門学校に入りなおし、今の仕事に就きました。短期大学で学んだことも職場で役立っていますし、2年間の学生生活は私には必要な時間だったんだと思います。

◆心をつなぐ津島の伝統芸能

両親は大玉村に住み、私は中島村で一人暮らしをしています。津島の方とはいろいろな形につながっています。避難した当初は、津島出身の児童と保護者でキャンプに出掛ける機会もありました。

それから地域の伝統芸能「津島の田植踊」を保存・継承していくという取組がありました。今年1月14日には二本松市で発表会が催され、私もお声掛けをいただいて、早乙女役を踊らせていただきました。

元々は男性だけが参加する踊りなので、子供の頃は兄だけ練習に誘われるのを羨ましく思った記憶があります。でも実際に踊ってみるとなかなか難しく、(笑)。中腰で、腰を低くして踊るほど美しいといわれますが、足が相当に疲れます。先輩はお年を召した方も腰を低く落とし、とても優雅に踊るので、すごいなあと。うちは祖父も父も踊り手で、母もお手本を知っているの、家族から駄目出しを受けながら特訓しました。

会場には、震災後会えなかった浪江の方がたくさん見に来てくださり、懐かしい方たちとお会いできました。また機会があったら踊らせていただきたいです。これからは浪江の皆さんとつながっていかれたらと思います。



原 茂さん(酒田)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山

取材日：8月7日 [平成30年11月 広報なみえ掲載]

多少の不便は覚悟の上。 何と云っても、浪江の我が家が一番

茂さんと幸子さんご夫妻は、現在お二人暮らし。

手入れの行き届いた自宅や庭木は、避難生活の最中も欠かさず丹精を込めた賜物なのでしょう。お気に入りの庭を見渡せる特等席に座る茂さんに、この7年の来し方をお聞きました。



おさななじみ
▲幼馴染同士で結婚し、いつも一緒に過ごす仲睦まじいご夫妻です。

◆特例宿泊から準備宿泊を経て、間もなく丸2年
平成28年9月1日から26日まで特例宿泊が実施された時、うちは真っ先に戻ったよ。それまでも、妻と2人で毎日のように二本松市郭内の仮設住宅から家に通っていたんだ。月1、2回、天候が悪かったり、体調が優れない時以外は、朝5時に出発して、葛尾の検問所が6時に開くの待って浪江に入った。最初の頃は外で弁当を買ったりしたけれど、そのうち飽きちゃって弁当を作って通ったよ。特例宿泊が決まったらすぐ

快適に暮らせるように、早い時期から畳や建具、エアコンやボイラーなどを替えたりして、準備万端に整えたんだ。
そして、同じ年の11月1日に準備宿泊が始まった時には、「セレモニーをやりますから」と連絡があつて、家に双葉警察署や浪江町役場、テレビや新聞などマスコミの人たちも大勢集まって、帰還第1号として紹介されちゃった。あれにはちょっとびっくりしたね。
◆8か所くらい避難したかな
あの大震災・原発事故の時は、巡回していたパトカーに避難を告げられて、家族で南相馬市原町区の馬事公苑に行ったんだ。そこで一緒になった人から聞いて、原町区の道の駅や原町第一小学校などに移ったんだよ。一緒に避難した孫は、道の駅で頂いた「モヤシの味噌汁」が大のお気に入りになったんだ。

南相馬市が大型バスで新潟へ避難するという話を聞いて、うちは息子たちが避難している千葉県成田市に行くことにした。成田市は孫たちの学校と住居をセットで探してくれたり、本当に素早い対応してくれました。20日間くらい滞在したけれど、浪江町の情報が全く入らないことと、こんなに世話になつていいのかという思いがあつて、福島県に戻って二本松市東和の下太田小学校に4日間、野地温泉(福島市)に約2か月避難した後、郭内応急仮設住宅に入ったんだ。仮設住宅の暮らしは相当なストレスがたまることがつくづく分かったよ。
◆週2、3回、原町へ買い出し。
でも分かっていただけだからね
昨年の秋、箸や筆記用具が急に持ちづらくなつて、当初は脳梗塞を疑われたけれど、急性筋痛症だったんだ。でも、入院して2、3日で歩けるようになったし、相変わらず午後6時過ぎには寝て、午前3時には起きる生活を元気に続けているよ。今は、闘病中の次男の様子が一番の気掛かりだね。
残念なのは、仮設の頃の隣近所も含めて70歳代前後の知り合いがだいぶ亡くなったことだな。それでも、浪江の自宅には息子や孫たち、親戚なんかがいよいよ訪ねてくれるし、確かに買物はちよつと遠いけれど、楽しく暮らしているよ。



福島県

いわき浪江押花会

松田サツ子さん(権現堂)・細田 和恵さん(棚 塩)
志賀智恵子さん(樋 渡)・伊東 勝子さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：8月24日 「平成30年11月 広報なみえ掲載」

心を寄せ合い支え合いながら、花を楽しむ



左から（上段）松田先生、細田さん（下段）志賀さん、伊東さん

「いわき浪江押花会（以下、会）」の主な活動は、いわき市の「なみえ交流館（以下、交流館）」での月に一度の教室です。伺った午前中も、メンバーの方々が楽しそうに制作をされていました。

熱心に指導をされているのは、なんと92歳になる松田先生（雅号 静華）と、そのお弟子さんの細田さん（雅号 静恵）。

会のお世話役をされている志賀さん、伊東さんにも加わっていただき、日頃の暮らしや会の活動についてお話いただきました。

加えて、当日教室に来られていた7人のメンバーからもコメントを聞かせていただきました。

松田先生

以前は浪江の町中、新町で豆腐屋「のんきや」を営んでいました。お店を閉めた後、*1「ふしぎな花俱樂部」の第1期生として、押し花を習い始めました。夫が油絵を描いていた影響もあるのでしょうか、もう30余年になります。平成21年には、静岡県で開催された「世界押し花絵芸術祭2009 in浜松」で浜松市商工会議所賞を受賞しました。

震災後はいわきから東京、そして再びいわき市に戻ってきました。声掛け訪問活動を行う*2「ぐるりんこ隊」の伊東さん、志賀さんが自宅を訪問してくださいまして、この会が生まれました。お声掛けいただいた時はうれしかったですね。発足当時は30人くらいでしたが、今は私たちを含めて13人ですが、みんな腕を上げて一人で額が作れるようになっていきます。会があるから長生きしているようなものです。

私はできれば浪江に帰りたいですね。四つの教室（静華の会）も、作品も額も、全て置いてきました。押し花は、自然にあるものならば何でも押す材料になりますから、採集や野外教室が行える、元どりの浪江を返してと言いたいですよ。

細田さん

祖母の代から「のん

きや」のお豆腐をひいきにしている、松田先生のことは良く知っていました。押し花は10年前から習い始め、インストラクターの資格を取るまでに約4年かかりました。

今年、浪江の仲間の方々に見ていただくよう制作した作品が、せんだいメディアアテーク（仙台市）での東北インストラクター展に出品できたことが、何よりうれしいです。

志賀さん

仙台市から二本松市を経て、平成24年6月からいわき市に住んでいます。浪江に居た頃から、松田先生や押し花のおうわさは聞いていましたし、十日市の時にお店での展示も見ていたんですよ。

浪江町の今後は気掛かりです。そうは言っても、いわきの住民にもなりきれず、長くお世話になっています。でも今は会のお世話が楽しいですし、作品も額まで作ると達成感があります。松田先生の元氣も大きな励みです。日頃、会の事務や会計、毎月の教室の日程調整、研修会のお世話などを行っています。毎年、研修旅行として「ふしぎな花俱樂部」の作品展に出掛けています。全国大会（日光市）や八王子市、そして今年は東北インストラクター展（仙台市）です。



メンバーの
皆さんから一言
(五十音順)

●池田チヨ子さん(谷津田)

いわき市で8年目になりま
す。浪江で押し花をやっていた
友人がいたのですが、その頃は
まだ覚えませんでした。会がで
きた時からの会員ですが、何年
経っても1年生。でも、みんな
と楽しく話したり、山に材料を
探しに行ったりしています。

●伊東さん

震災前は、救護施設
「福島県浪江ひまわり荘」に看
護師として勤務していました。
震災後、「ぐるりんご隊」の一
員として松田先生に出会い、こ
の交流館のサロン活動第1号と
して講師になってくださいとお
願いしたところ、すぐに承諾し
てくださったんですよ。それ
に、交流の場って大事ですよ
ね。押し花教室がきっかけとな
り、次々といろんな教室が立ち
上がりました。隣近所とうまく
付き合えなかった人も多かつた
んでしょうね。

浪江にはいい思い出がたく
さんあります。避難している時

●伊藤ハル子さん(樋渡)

震災直後からいわき市に。
ぐるりんご隊の一員で、松田先
生の地域を回っていました。松
田先生に講師になっていただき、
私も入会しました。日々、
草花を見ると作品作りのことを
考えてしまいます。

●岩倉 和子さん(川添)

白河に避難していましたが、
3年前からいわき市に住んでい
ます。交流館を訪れた時に案内
を見て入会。生きた花とは違
う、押し花の美しさにいつも
感動しています。

に大病をしましたが、これから
は前向きにのんびり、気負わず
に過ごしたいと思っています。

*1ふしぎな花倶楽部

平成4年、杉野俊幸(尙)杉野押し
花研究所が、株式会社日本ヴォー
グ社と提携し押し花の会「ふしぎ
な花倶楽部」が発足。以来、全国
各自治体イベントや文化事業、百
貨店の催事等に数多く参加し、全
国の倶楽部グループリーダーが地
域に根ざした押し花普及活動に取
り組んでいます。

「押し花」というと、新聞紙や電
話帳に挟んで作ったものを思い浮
かべがちですが、「ふしぎな花倶楽
部の押し花」は、植物学的な知識

●叶 静江さん(北幾世橋)

郡山から本宮へと避難し、5
年前にいわき市へ。以前から松田
先生の教室は知っていました。会
のお世話をされている志賀先
生に誘われ、知り合いもいたので
入りました。花が好きで、押し花
を見た途端「うわあっ」という感
じで、今は材料探しに夢中です。

●佐藤ユウ子さん(北幾世橋)

いわき市に住んで3年目です。
80歳を超した夫は病気がちな
のですが、毎日を明るく、楽しく
過ごしたいと思っていました。こ
叶さんに誘われて入会しました。
花が大好きなので、うれしい趣
味です。

はもちろん、乾燥や保存などの化
学技術や様々な制作道具を用いな
がら、多様な表現方法を駆使し
て、絵画のごとく創るものです。

参考：日本ヴォーグ社 ふしぎな
花倶楽部ホームページ

*2ぐるりんご隊

いわき市内で避難生活を送る浪
江町民同士のつながりや心を支え
るため、「なみえ絆いわき会」に所
属する女性を中心に、平成24年4
月に発足。エリア別に月1回、担
当者が戸別訪問し、困りごとや健
康相談などの活動を5年間行っ
てきましたが、平成29年3月に一旦
解散。同年10月に浪江町から感謝
状の贈呈を受けました。

●中野 友子さん(立野)

避難した矢吹町では家族離
れ離れで4年暮らした後、いわ
き市に。近所付き合いもなく、
半年以上家にこもってしまい、
交流館を訪ねました。会の期の
途中でさすがに入会させて
いただき、今では外に出るきつ
かけもできて、気持ちも楽にな
りました。

●茂木 文子さん(樋渡)

震災の年の7月にはいわき
市に。市内を転々とし、隣近所
との付き合いもなかったため、
平成27年に入会。材料探しも楽
しいですが、作品ができて家に
飾る楽しみも大きいですね。



福島県

荒川 勝己さん(請戸)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：9月7日 [平成30年11月 広報なみえ掲載]

切り花作りはまだまだ勉強です。 それでも、農業は楽しい

震災前は請戸に暮らし、津波と原発事故により秋田に避難されていた荒川さんにお話を伺ったのは、第6号(平成23年12月号)の時です。それから7年近くが過ぎ、浪江に戻られた現在は、花卉専業農家として加倉地区で再起を図っていらっしゃいます。



◆私の浪江の暮らしに、花卉研究会の仲間たちは大切な存在です

今は下加倉に自宅を移しましたが、以前は請戸で米とシクラメンなどの鉢物を作っていました。災害発生当時、私は母や家族のことは父に任せて消防団の活動をしていたものですから、丸2日後の3月13日まで家族とは会えなかったんです。両親は埼玉に住む私の姉の所へ、私たち夫婦と娘は、妻の実家がある秋田へ避難しました。震災当時、児童館の年長さんだった娘は今、中学2年生になりました。妻と共に秋田に居ますが、原発事故のリスクを最小限に減らしたいし、娘なりの繋がりを大事にしてやりたいと思っています。花卉栽培で農業を再開しようと、平成29年4月からほぼ毎月、準備のために秋田と浪江を往復しました。農家の長男坊ですからね、墓守もしなくちゃいけないし、戻ることは決めていました。避難指示解除後は、ここで父とトルコギキョウやストックなどを作っています。請戸で作っていた鉢物は花が咲いてからでしたが、切り花はつぼみから開花までのタイミングを計りながら出荷しなければならず、試行錯誤を繰り返しています。その上、今年は待たなしの酷暑だったでしょう、

大変でした。そんな切り花づくりの「初心者マーク」ですから、*浪江町花卉研究会に入っ

て仲間と共に品質向上を図っています。なかなか先輩方のようにはいかないんですよ。うちのトルコギキョウは2月に定植して初夏に出荷するものや、5月から定植しお盆の時期に向けて出荷するもの、時期をずらして10月出しの商品テストを行うもの、そして12月にはストックの出荷など、年間を通して忙しくしています。今は、今年の秋に結婚式を予定している友達と式に使う花を丹精を込めて育てているところです。

◆家ができたことで、人が立ち寄ってくれるようになりました

6月から7月、ビニールハウスが「真っ赤」になります。トルコギキョウの開花抑制のために赤色灯をつけるためですが、結構目立ちます。だいたい父の友人・知人ではありますが、ちよこちよこ立ち寄ってくるようにになりました。

今の浪江町内には、戻ってきた人より避難先から通っている人が多いように感じます。戻ってきた方も年配の方が多く、活気もあまりありません。近隣の富岡町や檜葉町のようないなシヨツピングタウンがない

浪江では、買物が大変です。ねじ1本買うのも30分かけて原町(南相馬市)まで行かなくてはなりません。日々の食品も買い出しが必要です。ですから、小さくてもいいから品ぞろえがある程度充実しているスーパーが欲しいと思っています。

*農業者組織「花・夢・想みらい塾 浪江町花卉研究会」

原発事故の被災地である浪江町を花の一大産地にしようと平成29年8月19日に発足。

いち早く浪江町に戻り、農業による復興を目指す会長の川村博さん(NPO法人Jin理事長)を中心に、花卉農家や新規就農者など14人が集い、活動を行っている。荒川さんによると、花卉農家仲間は準備中も含めて現在7軒。



▲ビニールハウスにて。このハウスが時期によって赤く光るそうです。(福浪線沿い)



久保田健治さん・美智子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：9月21日 [平成30年12月 広報なみえ掲載]

浪江町での暮らしを楽しみにしています

久保田さん夫婦は、健治さんの会社の関係で、千葉県館山市に避難し暮らしていましたが、樋渡の自宅をリフォームし、今年10月中旬に戻ることにしました。健治さんは、何度か浪江町の自宅に行き来し、家の前の畑を耕すなど、準備を進めてきました。

浪江町での暮らしへの期待と不安をお聞きました。



▲館山の借上げ住宅にて

美智子さん 震災の後、私は、主人と一緒に津島の実家に避難しました。実家には姉家族や叔父家族、全部で10人が避難していましたが、2日後の第一原発の水素爆発と避難指示を受け、どうしたものかと思っていたところ、郡山に住む弟が心配して迎えに来てくれました。みんな車で分乗し、弟のマンションに向かいました。弟のマンションで約2週間、多い時には16人が一緒に暮らしました。今考えると、横になって寝るスペースも十分に取れないのに、誰も文句を言わずよく一緒に過ごせたなと思います。先が見えない中、とにかく食べてニュースな

どで状況を見ることしかできなかったもので、不満を感じる余裕もなかったんだと思います。
健治さん 郡山に避難し2週間ほどたった頃、会社から連絡があり、宮城と館山の営業所どころでの勤務を希望するかと聞かれました。館山の営業所以前働いていたこともあり、館山への転勤を希望しました。今、住んでいるのは社宅で、会社が借上げ措置をしてくれました。歩いて行ける距離にスーパーやレストランがあり暮らすには便利です。近くにある「里見の湯」が震災後しばらくの間、避難者向けに無料券を配布してくれました。慣れない場所での暮らしで疲れていたものでありがたかったですね。私は、会社を定年退職した後、痛めていた膝の手術で入院、退院した後はリハビリも兼ねてジムに通いました。じっとしているのが嫌いなので、浪江に帰ったら、散歩をしたり、畑を耕したりして過ごしたいですね。
美智子さん 館山に移って、しばらくの間は話す相手もいなかったもので、家事を済ませたら寝て過ごすということもありました。そのうち近所の人たちとは、挨拶を交わしたり、雨が降ったら「洗濯物がぬれるよ」と教えてもらえるような関係になりましたが、浪江にいた時の

ように、お茶を飲んだり、おしゃべりをしたりといったことがないので寂しかったですね。ここで暮らして7年、今では野菜をもらったり、おかずのやり取りをする友達もできました。ただ、親しくなった相手から、「賠償金もらって、お金あるでしょ、いいね」と言われた時には、口惜しくて、悲しくて、たまりませんでした。
浪江に帰ったら、郡山で弟と暮らす母の世話にも行きやすくなります。帰った人同士のお付き合いを楽しみたいです。スクーターか自転車を買おうかなとも思っています。
健治さん 私は7人兄弟の次男で、小高にある実家も更地になっていますが、先祖の墓があり、親戚も浪江町近隣に住んでいます。兄弟で墓を守っていきたいと思いますし、やっぱり、庭があって土いじりができる家に住みたいと思います。浪江に帰って、不便なことも多いと思うけれど生まれ育った土地で妻と2人で暮らし、落ち着いたら仕事もできたらと思っています。
館山でお世話になった皆さんに感謝しています。そして、これからの浪江での暮らしを楽しみにしています。浪江の皆さん、よろしくお願ひします。



ちひろ 木村 知宙さん(権現堂)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤

取材日：10月17日 [平成30年12月 広報なみえ掲載]

将来、高校と連携して 復興の仕事ができれば最高！

震災時は小学5年生だった木村さん。その後、二本松市東和中学校、ふたば未来学園高等学校を卒業し、今年4月からは東京電力ホールディングスに入社。現在は福島第二原子力発電所に配属になり研修を受ける日々です。

仕事での目標と、プライベートでの目標の二つを大事にして暮らしています。



▲優しい笑顔が印象的な木村さん

会社には、4月に入社したばかりで、今はまだ研修中です。施設や機械の概要や仕組みを学びながら、グループワークでディスカッションやプレゼンテーションをして、聞いている方に納得してもらえるかどうか練習する等、経験の場をもらっています。会社の同期は大学卒業の方が多いので、身に付いているスキルが高くて、焦りを感じています。毎日ぎっしり詰まった研修内容で、風邪で1日休むと遅れがでてしまい自分が困るので、体調管理には気を付けていて、自炊では野菜を多く食べるように意識しています。

◆復興に関わりたい

私は将来、廃炉や復興の仕事

事を通じて人の役に立つ仕事かしたいと考えています。会社としても福島復興に寄与したいと考えているし、だからこそ新しい復興事業をつくらう、と私も力が入ります。あとは、プライベートについても仕事だけの生活にならずに、浪江町出身者の住民に近い存在として、町づくりの活動もやってみたいと思っています。

こんな風に復興や町づくりに関心を持ったのは、高校での経験や学びのお陰です。福島大学の学生さんが勉強を教えに来てくれたり、ゲストティーチャーが来てくれたり、いろんな人と関わり刺激を受けることができました。また新設高校の1期生だったので、仕組みが無い中、自分たちで考えながら文化祭や部活動、授業などに何でも取り組みました。授業の「未来創造探究」では再生可能エネルギーに取り組むことに決め、調べていく中で「振動発電」に出会い、夢中で勉強しました。国道6号を通るトラックの多さから実現可能ではないかとアイデアが浮かんだのです。

浪江町のことを考えるようになったのは、広野町や楡葉町から自宅がある二本松市に向か

う時、浪江町を通ったことがきっかけです。その際に浪江の活気のない町の風景を見るうちに「いろんな人を巻き込んで元の町のように戻せたらな」と考えるようになりました。これからは、町の行事に参加したり、町づくりの事業やイベントを手伝えたりできたらいいなと思っています。

◆1年後の成人式が気になる

私に貴重な体験の場をくれたふたば未来学園の後輩のみんなと連携して、仕事や事業が実施できれば最高だなと思います。震災が無ければ行くことになかった高校ですが、学校生活は楽しかった思い出いっぱいあります。社会人になった今、高校の同級生と会うと「高校生に戻りたいね」という話で盛り上がったります。なんです。

先日、小学校の同級生と話をしていたら、1年後の成人式の話になりました。「浪江の成人式に行く？」「二本松の成人式に行く？」「何人くらい参加するのかな？」。小学校の同級生とは、なかなか集まる機会がないので、会いたい気持ちでいっぱいなんです。今から、成人式が楽しみです。



福島県

高木 七美さん(幾世橋)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津

取材日：10月22日 [平成30年12月 広報なみえ掲載]

被災したからこそその経験を生かして、 人の役に立てるようになりたい



▲「人前で話すのは平気だけれど写真は苦手」と照れる高木さん



▲復興大使の活動では何度も新聞で紹介されました

小さい頃から積極的な性格で、面白そうなことを見つけると何でも参加するという中学3年生の高木さん。避難先でもたくさんのことを吸収し、力強く成長しています。

大好きな音楽やアートで人の役に立ちたいと、将来に向けて頑張っています。

◆避難生活での出会い

被災した時は小学1年生でした。避難所や親戚宅に滞在した後、二本松市の岳温泉にあった祖父の知人の別荘に母と住むことになり、3年間暮らしました。父が仕事の関係でいわき市にいたので、5年生の時にいわき市に引っ越してからは3人で暮らしています。

岳温泉では周りの人がとてもよくしてくれて、いじめに遭うこともありませんでした。初めは緊張しましたが、友達ともすぐに打ち解けました。浪江町には無かったスキートの授業や、登山も体験しました。雪が多くて、同じ福島県内でも気候が全然違うことに驚きました。温泉街で、地域の人たちのつながりが強く、みんな「七美、七美」と可愛がってくれました。あつ

という間でしたが、被災しなければできなかった体験だと思います。岳温泉の友達とは、今でも時々連絡を取り合っています。

◆「ふくしま復興大使」を経験

中学2年生の時、福島民報社で募集している「ふくしま復興大使」に応募し、昨年8月から1年間務めました。愛媛県松山市に派遣され、全国の高校生が俳句の腕前を競う「俳句甲子園」の取組を学びました。地域全体で参加できるとも大きなイベントで、福島でも何かこういふイベントができたらと思います。今年6月に大玉村で開催された「全国植樹祭」のイベントでは、ふくしま復興大使の代表として活動内容の発表をしました。大舞台とても緊張しましたが、いい経験になりました。

広野町、楢葉町、浪江町と、原発被災地の視察にも行きました。どこの土地でもみんな、町の復興や地域づくりに力を合わせて取り組んでいて、地域ごとの良さがありません。被災して全国のいろいろな方にお世話に

なったので、私ももっといろいろな地域の人の役に立てたらと思っています。復興大使の任期は1年で終了しましたが、任期終了後も参加できるイベントなどもあるので、これからも積極的に参加していきたいです。

◆アートや音楽で地域を元気にしたい

小さい頃から絵を描くのが好きで、中学では美術部に所属しています。ルノワールやモネのような古典も好きだし、現代美術も好きで、県内外の美術館によく連れて行ってもらいます。音楽やダンスも好きで、小さい頃に企業のキャンペーンにダンス動画を投稿したり、3日間のレッスンで英語のショーに参加する「ヤングアメリカンズ」に参加したりした経験もあります。今は、ペンタプレットを使って自分でデザインや作曲もしています。将来は芸術系の大学に進み、音楽やアートで地域を元気にする活動ができたらと思っています。そのために、まずは高校受験を頑張ります。被災したことで、浪江町、岳温泉、いわき市の三つの故郷ができました。浪江町も早く復興してほしいです。人が戻ってくれば、また前のようににぎやかなになると思うので、そうなることを願っています。



佐藤 秀三さん(権現堂)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田

取材日：11月13日 [平成31年1月 広報なみえ掲載]

浪江の子供たちから元気をもらいながら、新しい浪江を創っていきたい

佐藤種苗店を営む佐藤さんは、権現堂区長会、浪江町行政区長会の会長を務めておられます。

震災前からの区長のご経験を生かし、「浪江の復興は、人が住めるようになること、誰もが立ち寄りたくなる町になること」をモットーに、新たな浪江のまちづくりに奔走していらっしゃいます。



▲復興祈念として収集を続けていらっしゃる御札と御朱印帳を収めた部屋に案内していただきました。「震災前と同じように家族全員で氏神様への初詣ができたことがうれしかった」そうです。

◆避難中、厳しいと思ったことはなかったですね
あの大震災が起きた日は、私の誕生日でした。運転免許証の更新に出掛け、新しい免許証を手に店に戻ったら、経験したことのない大きな揺れ。津波警報が鳴り、区長だった私は、気になるお年寄りが何人かいたので地区内を一回りしました。幸い皆無事でしたが、私たち家族は3月15日まで津島活性化センターに避難しました。原発事故の情報は全く入ってきませんでしたね。その間、すぐに自宅に戻れると思っていたので、権現堂の区長さん方数人と震災ごみの片付けの相談をしていました。

その後、全町避難となり、

二本松市あだたら体育館から岳温泉へ。そして二本松市安達運動場仮設住宅へと移りました。「この場を何とかしたい」と、避難先のホテルでも仮設住宅でも自治会を立ち上げ、避難先の地元の方々と関わりながら、毎日を生懸命に楽しく過ごしてきました。中でも、安達運動場仮設住宅は、当時244世帯560人の最も大きな仮設住宅で、初代自治会長を務めました。

◆「困った時の秀三さん」と、毎日、大勢の方が訪れます

平成28年9月に実施された特別宿泊の時から、うちの店に浪江町内で人の集まれる場所を作ろうと、種苗の陳列をしていた大きなテーブルを改修しました。そして帰還準備期間を経て、いの一歩に町に戻ったんです。最初にテーブルを活用してくれた手芸グループから始まり、浪江に戻った人たちが浪江を訪れてくださる人たちが、ここに毎日訪れてくれます。

区長としての今の悩みは、閲覧板が町内に回せず、情報伝達が難しいことです。どのように伝えたらよいか、どうしたら伝わるか、いろいろ試しているところです。七夕の短冊に「浪江町内のごみ拾いをしよう」と書いたことがきっかけで、まち

づくりの団体と一緒にクリーン作戦を行ったところ、福島市や会津地方などから大勢の人が集まってくれました。

また、「チームなみえG&B（Gは爺ちゃん、Bは婆ちゃん）」を立ち上げ、なみえ創成小・中学校の子供たちと触れ合いながら、校内の花壇作りや清掃、給食を作って一緒に食べたり。夏休みにはバス旅行にも出掛けています。地域ぐるみの運動会の開催も呼び掛け、250人も集まり大盛況。子供たちを励ますつもりでしたが、私たちがの方が元気をもらっていますよ。

◆廃炉や復興は急がずともいい。人が住めば、町は必ず復興します

大震災による津波被害と原発事故で全町避難を余儀なくされた浪江でも、人が住めるようになれば、震災前と違った形でも必ず復旧、復興は成し遂げられると私は信じています。今、浪江に帰っている私にとっては、復興度88%なんです。これからも「誰でも立ち寄りたくなる浪江町」を目指して、これからも町のいい所や伝統文化、季節の行事などを発信し続けながら、日々楽しく過ごしていきたいと思っています。

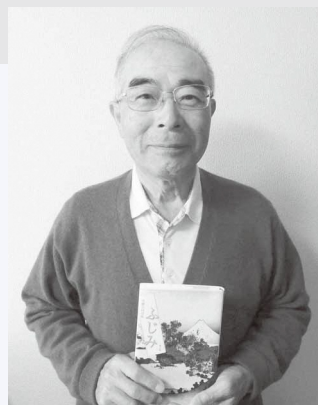


京都府

白瀬 美智男さん(田尻)

取材者：NPO法人つなぎteおおむた 彌永
取材日：10月10日 [平成31年1月 広報なみえ掲載]

除染待つ仮設の壁に農事暦



▲合同句集を手に笑顔の白瀬さん

「震災前に川柳との出会いがありました。原発事故で被災し、各地を転々。そんな時、出会って間もない川柳が避難生活に生きがいをもたらしてくれました」と語る白瀬さん。第13号（平成24年7月号）掲載時、「今の生活を少しでも活力あるものとするために、前向きに頑張りたい」とお話をされていた言葉どおり、川柳づくりとウォーキングで、頭と心と体の健康を保ちながら、現在もご家族そろって京都でお過ごしです。

◆川柳作句が日々の日課

出身は、南相馬市です。双葉高校勤務の關係で浪江町に移住し、40年近く住みました。その後、福島県教育センターに勤務し、この時に川柳と出会ったんです。今では川柳作句が日々の日課です。川柳仲間もできて、合同句集を出すこともできました。冒頭の句に『農事暦』とありますが、退職後の楽しみにと、早くから畑を借りて準備してたんですよ。300坪、広いでしょ。柿の木もあって、良いところだったんですが、諦めざるを得なかったですね。

◆浪江から京都へ

震災時、息子はプログラム・エンジニアとして浪江町に就職していましたが、その息子が出張先の東京で買った線量計が反応するんです。情報が錯綜する中で、いわきの線量が低いということだったので、最初の避難先の福島市からいわき市へ行きました。ですが駄目、やはり線量的には高かった。孫のこともあるので、娘家族は旦那さんの仕事先の京都へ移動させました。その後、インターネットで調べたら、その京都が避難者受入れをしていたんです。電話をかけたなら「すぐにどうぞ」と言っていたので、4月24日の真夜中に出て、翌25日の夕方京都へ到着。これから住むことになる府営住宅には、地域の

皆さんが待っていてくださいました。阪神淡路大震災の受入れ経験があるから、とのことでしたが、本当に有り難く胸がいっぱいになりました。

こうして京都での避難生活を始めましたが、浪江で楽しみにしていた農作業もできない、釣りもできない、パークゴルフもない、ないないの、そんな日々が続きました。川柳だけでは引きこもっていたでしょうが、浪江にいた時からやっていたもう一つの趣味、ウォーキングで救われました。今は1日1万歩を目指し、ウォーキングを日課にしています。ウォーキング協会にも所属していて、月5、6回は京都府内を中心に、あちらこちらを歩いていますよ。

◆家族の思い

受け入れていただいた京都の府営住宅で2年半過ごしましたが、「いつまでも他人様の家にいるよりも」と、全財産をはたき、マンションを購入しました。浪江の家には米を置いていたので、とんでもない数の野ネズミがすみついていました。だんだんと朽ちていく我が家を解体し、庭の片付けなどをやりましたが、その後、1年くらい行っていません。でも、家が無くなったからといって、決して町への思いが無くなったわけではないんです。

京都へ避難後、息子は京都と東京を往復する生活を続けていたんですが、「家族で支え合う暮らしを大事にしたい」と考えて、退職。自炊していた学生時代に興味を持った、料理の道に進むことを決めたんです。京都市内の調理師専門学校に通い、料亭での経験も積んで、平成29年8月にお店をオープンしました。

妻は避難後も元気にしています。自宅で、息子の店に出す料理の下ごしらえを手伝ったりね。「浪江・福島料理や酒を通じて福島のことを知ってもらい、同時に、自分自身も故郷の一員であり続けたい」。開店時に新聞取材を受けたときの息子の言葉ですが、これは息子だけではなく、私たち家族みんなの思いでもあります。



▲ランチタイムはバイキング形式。イカニンジン、ひきないり、いわき市から取り寄せているトマト等から、好みのものを。

『瀬のしろ』～和ダイニングバー～

京都市伏見区桃山町山ノ下55-15

TEL 075 (644) 5770

URL <http://senoshiro.seesaa.net/>



ふるさと浪江会

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：11月9日 「平成31年1月 広報なみえ掲載」

「ふるさと」の復興を応援したい



▲ふるさと浪江会役員メンバー

ふるさと浪江会は平成22年に、「ふるさと納税制度」を活用して浪江町を応援しようと、関東圏に暮らす浪江町出身者で立ち上げられました。

東日本大震災後は、「ふるさとを忘れない」という思いで、支援のための寄附活動や浪江町への視察バス旅行などを行っています。

会長の原田直之さんは、福島県内はもちろん全国各地で公演を行い、歌を通して浪江町民の交流と元気づくりを進めています。

●原田 直之さん

浪江町は、海もあり山もあり、自然豊かな町。ふるさとを離れて55年余り、いつも浪江を思い歌っています。一番の思い出は十日市ですね。3日間、町を挙げてのイベントで、子供にとっても大人にとっても大きな楽しみでした。東日本大震災で、浪江の実家も無くなってしまいました。次世代の人たちが浪江に戻って、暮らすことができるようになったらと願っています。

●斉藤 仁也さん

酒井の出身です。丈六公園の裏側に実家があり、林あり田んぼありの環境でした。川で年中泳いでいました。わんぱくで勉強はあんまりしませんでしたね。80歳を越えても、病気一つしないでいられるのは、小さい時に走り回って遊んで培った体力のお陰と思っています。5人兄弟、皆それぞれ遠く離れて暮らす今、お墓参りにも皆がそろうことが難しい。自分が元気なうちに浪江の復興が見られたらと思います。

●能勢 秀幸さん

樋渡出身です。生まれも育ちも浪江で、震災後、先祖代々の家の屋根を直したら、親戚から「住める当てもないのにはか

●大清水善信さん

幾世橋出身です。「ふるさと浪江会」設立の時から関わっています。高校卒業までは浪江にいました。フナ釣り、ドジョウ取り、思い出はたくさんあり、浪江のことはいつも心から離れません。浪江町出身の人たちが集まるこの場があつて良かったと思います。町役場から協力の依頼があれば、対応したいと思っています。

●見山ミチ子さん

大堀出身です。実家は大堀相馬焼の窯元です。登り窯への「窯入れ」や「窯出し」の時には、請戸の浜で取れた魚など、ごちそうがたくさん並び、職人の皆さんと一緒にいただきました。壊れた器でままごとをしたことや、高瀬川で取れたアユを庭先で炭火焼きにして食べたことが思い出されます。大堀は今もまだ、避難指示区域なので事



ふるさと浪江会

設立当時の会員は70人、現在の会員数は120人。

浪江町出身者で関東圏に暮らす人たちがメンバー。

連絡先：ふるさと浪江会事務局
木幡正行さん
☎090(5585)3861



▲和やかに意見交換

前登録をしないとお墓参りにも行けません。父や母のお墓の前で、ゆっくりと手を合わせられる日が早く来ることを願っています。

●木幡 正行さん

田尻出身です。父母は震災で、浪江から秋田の姉夫婦の所に避難しました。その後、東京の私の所に来て一緒に暮らしていました。父は亡くなり、今は母一人になりました。母は「帰りたい」とよく口にします。震災後、年に4、5回は浪江に帰りますが、行くたびに壊れていく家を見るたびに辛くなります。浪江に行っても、人がほとんどいない町は不思議な感じがします。昔ながらの田尻、浪江はどうなって行くのでしょうか。役場関係者さまや地元に戻られた皆さまが頑張っていることは応援いたします。今後、5年10年後はどうなっているのか、元の町に戻るのか心配ではありません。

●吉田 敏英さん

苅宿出身です。震災前は、お盆と年末年始に浪江に帰っていました。帰れることが当たり前でしたが、それができないのが悲しいです。母校の双葉高校は、震災で休校。同窓会が毎年5月に開かれています。新し

い卒業生が入ってこないという現実寂しさが募ります。

●浅野 節子さん

室原出身です。ふるさと浪江会の立ち上げの時から関わってきました。7人兄弟ですが長男以外は浪江から出ています。私も高校卒業以降、東京で暮らしています。実家は、19代続く農家ですが、震災以降はお墓参りの時にしか実家に立ち寄ることはありません。浪江のインターチェンジから見えるのだけれど入れないという現実にもどかしさを感じます。妹が映画関係の仕事をしていて、震災後4か月目に町に入りました。請戸の家並みが津波で流され土台だけが残り、内陸に船が押し流されている光景や「車の窓は開けないでください」という言葉に「くげんとしたことが思い出されます。実家には、申請をしないといまだに入れない状況です。家の中は泥棒に荒らされ、庭にあった灯籠まで持ち去られてしまいました。思い出がたくさんある家が荒れていくのを見るのは辛いです。

●作間 清子さん 浅野さんの妹

室原出身です。「ふるさととは遠くなりけり」と言いつつ、いつでも帰れると思っていたふるさとがもう無くなってしまっ



▲浪江町訪問旅行についての打合せ

た。無くなると行きたい、行けないと思うと余計に行きたくなります。しゃくに障ります。少しでもふるさとのためにできることがないか考える日々です。

●山田 攻さん

牛渡出身です。震災後、2年目に実家に行きました。実家の周辺は草ぼうぼうで、請戸の浜は何もない野原のような様子に驚きました。震災から4年目に、母が避難先の二本松で亡くなりました。今の浪江には、若者が働く場所がない。常磐線が全線開通し、企業誘致が進んだら違ってくると思います。国や福島県がもっと復興に向けた支援を行ってくれたらと思う。震災前は、浪江に帰ると同級生、同窓生に会えるのが楽しみでした。丈六公園の風景や十日市のにぎわいが思い出されます。



福島県

Wonderなみえ

常盤 香世さん(川添)・大原 陽子さん(川添)
鈴木 純さん(田尻)・佐々木和子さん(本宮市)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 谷津

取材日：11月10日 [平成31年2月 広報なみえ掲載]

活動を続けることがみんなの心を つないでいます



▲前列左から 常盤さん、大原さん
後列左から 鈴木さん、佐々木さん

11月24日と25日、浪江町地域スポーツセンターで「復興なみえ町十日市祭」が開催されました。

昨年に引き続き、十日市祭でのステージ発表に向け、浪江町地域スポーツセンターに集まって練習をしているよさこいチーム「Wonderなみえ」の皆さんを訪ねました。12月には、浪江町仮設商店街まち・なみ・まるしえの「まるしえの日」と同時開催された「浪江ふるさとまつり北海道・東北復興YOSAKOI」でも華麗な演舞を披露。地元よさこいチームとして、各地に引っ張りだこです。これまでの経緯と今の想いをお聞きしました。

◆チーム結成からこれまでの経緯を教えてください

常盤さん 平成13年の「うつくしま未来博」の時に、商工会が主導して県内各地によさこいチームができました。

「Wonderなみえ」もその時に発足して、震災前は週2回練習をしていました。小中学生も合わせて50人くらいいたでしょう。震災でばらばらになり「解散するしかないかな」と思いましたが、その年の夏に二本松で開催された夏祭りに「踊らないか」と声を掛けていた。メンバーに連絡してみたら、当日は結構な人数が集まったんです。それで「続けよう」ということになって、それから月に2、3回、いわき市などで練習をしながら、続けてきました。

◆イベントに出る機会はどのくらいあるのでしょうか？

常盤さん 今は年に20回以上あります。避難指示が一部解除になってから増えました。相双地域の他のチームは解散したところもあるので余計に声が掛かるのかもしれないですね。メンバーが各地に散らばっているのに、練習には数人しか来られないことが多いんですが、本番にはなんだかんだで15人くらい集まります。LINE(スマートフォン)

フォンやタブレットなどで使用できるソーシャル・ネットワークワーキング・サービスの一つ)で動画を共有して、それを見ながら各自自宅で練習するなどして、なんとかこなしています。新潟や東京にもメンバーがいるんですけど、本番に駆け付けてくれます。

大原さん 毎月何かとイベントがあるので、それで日々が過ぎていきます。長くやっているのも、もし無くなったら何かがすっぱり抜けたみたいになってしまうと思います。みんな住んでいるところは違うので、活動が無ければ会う機会も無いでしょうから、貴重なつながりです。あまり来られない人とも、LINEでいつも会話していると離れている感じがしなくて、お互いの場所が災害があると自然と「大丈夫だったか？」と声を掛け合ったりしています。

◆各地にメンバーが散らばっていても大変ではないですか？

大原さん 毎回数人しか集まらないので、何度も心が折れそうになりました。一度「もう辞めよう」ということになったんですが、ある人から「避難先では自分の境遇を分かってくれる人がいない。練習で集まった時だけ気持ちを話すことができるといい。それを楽しみに日々頑張る。」と話を聞きました。



▲子供たちやお年寄りにもその場で参加してもらえる曲なども工夫しています



▲活動を「育休」中のメンバーも集まり、にぎやかな練習となりました

ているから、辞めないで」と言われて、やっぱり続けようということになりました。その人もあんまり来られないんですけどね(笑)。

鈴木さん 私たち自身も、お互いに会うのが楽しみでやっ

るところがあります。集まるとまずしゃべってしまつて、練習がなかなか始まらない(笑)。練習も楽しみだけど、久しぶりに会ってしゃべるのも楽しみで

佐々木さん イベントに出ると、練習に来られないメンバー

も見に来て「やっつてもらつてよかった」と言ってくれます。今は踊る側と見る側に別れていても、同じメンバーとしての気持ちのつながりがある。だから、大変だけどやっつている意味があるな、と思います。

◆佐々木さんは浪江町民ではありませんでしたが、震災後にメンバーになりました

佐々木さん 私はもともと本宮市のチームで踊っていたんですが、メンバーが減って震災の少し前に自然消滅してしまつたんです。そのまま離れるのもつたいたないので県のよさこい振興会のサポーターをしていたんですが、たまたま家が近くなつた常盤さんに声を掛けてもらつて。今は宮城県の登米市に引っ越したんですが、そのまま参加しています。機会が無いと全く動かなくなってしまうので、あ

常盤さん 震災後に久しぶりに

踊ったときは息が切れて大変でした(笑)。やっぱり続けていな

いと駄目ですね。やっつけない人には「元気だね」と言われますが、やっついているから元気なのかと思います。

◆避難指示が一部解除になつて、浪江町で練習できるようになりました。町の様子を見てどんなことを感じていますか?

佐々木さん 「信号が点滅信号じゃなくなった!」とか「電車が走ってる!」とか、そういう変化に感動がありますね。

鈴木さん 最初の頃は、子供たちを連れて来ることに躊躇(ちゆうじゆ)しましたが、今は楽しく来られるようになりました。今日も「どこ行くの?」「浪江だよ。お父さんのお母さんの家があるところだよ」なんて話しながら来ました。

大原さん 解除になる前は、もう戻ってくる場所ではないという感覚でしたが、以前勤めていた職場の後輩が戻ってきて働いていたりするのを見ると「ああ、普通に住めるんだな」と。

福島市内に家を建ててしまったので複雑ではありますが。
常盤さん 同世代の人が戻るために家を建て直しているのを知ったりすると、私もいずれば戻ってこようかなと考えたりはしますね。

◆これからの活動の展望について教えてください

常盤さん ここ数年、ずっと同じ曲を踊っていましたが、最近新しい曲を作りました。これまでは「鮭が荒波を越えて故郷に帰ってくる」という内容の曲を復興のイメージに重ねて踊っていました。今度は明るくて空に飛ばたくようなイメージの曲にしました。衣装も新しいものを作っています。そうやって少しずつ新しい挑戦もしていきたいですね。

鈴木さん 私は23歳の時にメンバーになってから15年続けていて、メンバーと結婚しました。子供たちも一緒に踊ったこともありますし、震災後に生まれた娘も旗振りをやりたいと言っている。これからも一緒に楽しく続けられたらと思います。

佐々木さん 今日、踊れるのは4人ですが、子供を連れて遊びに来てくれる仲間がいます。子供たちが増えてきているので、これから一緒に踊れるようになるのが楽しみです。

大原さん 体力的にきついときもありますが、仲間と一緒に運動できるので心身ともに元氣になれます。そういう場はなかなか無いのでこれからも続けていきたいです。メンバーはいつでも募集していますので、気軽に声を掛けてください!



ふるさと酒井誌編集委員会

高田 勝人さん(編集長)・井戸川あけみさん(副編集長)
中谷 英一さん(編集委員)・高田トシ子さん(編集委員)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：11月30日 「平成31年2月 広報なみえ掲載」

酒井の人たちにふるさとの記録を手渡すために



帰還困難区域となっている酒井地区の様々な記憶を集め、記録として残すために、「ふるさと酒井誌編集委員会」が編さんに取り組んでいる『ふるさと酒井』(以下、冊子)は、目下、最後の編集・印刷入稿作業の段階です。編集委員11人の中から代表として4人の方々、それぞれの暮らしや編さんにまつわるお話などを伺いました。

◆あの大震災からの避難の様子や今までの暮らしをお聞かせください

中谷さん 勤務していたJAふたばの社内で地震に遭いました。帰宅指示に従い退社しましたが、道路は至る所で陥没。山側の道を通ってようやく18時ごろに浪江に戻りました。翌朝、全町避難となり、すでに津島の

避難所は満杯と聞き、南相馬市小高区の妻の親戚を頼りました。2泊だけお世話になり、同市原町区の小学校に避難しましたが、本当に寒かったです。道の駅「南相馬」に移動した時に3号機の爆発を知り、郡山市に避難しました。息子の会社で社員寮をお世話してください、今も住んでいます。

井戸川さん あの日、勤務先の中学校が避難所となったため、被災者対応をしていました。翌朝浪江に戻り、連絡が取れなかった母の無事を確認し安堵しましたが、自宅は手の付けられない状況でした。再び職場に戻ろうとした時、浪江町に避難指示が出されました。実家に寄り、母と妹夫婦と共に小高に向かいました。

夕方には小高区にも避難指示が出されたため、原町区の学校に避難し、被災者で埋め尽くされた体育館で寒い一夜を過ごし、翌日、みんなで姉が住む仙台市に避難しました。2年前に、母は亡くなりましたが、知り合いでもない慣れない地での生活は、とても寂しくつらいものだったと思います。私は学校再開後、なんとか相馬市にアパートを借りることができ、今に至っています。

高田トシ子さん (高田勝人さんとトシ子さんはご夫婦) 3月12日

は甥の結婚式が予定されていたため、前日11日の午後、郡山市の妹の家に向かい、到着後もなくあの大震災が起こりました。当時、夫は酒井区長だったので地区のことが気掛かりだったようですが、避難指示が出ているのでどうすることもできませんでした。

家族で話し合い、私たちは横浜市に住む義姉夫婦の家に避難しました。そして、6か月間お世話になった後、近所の借上げ住宅に移り、現在に至っています。

高田勝人さん 酒井行政区区長として一番先にしたことは、地区の皆さんの安否確認でした。震災直後、高齢者の方々は携帯電話を持っておらず、避難場所を転々とされていた方も多くて、確認作業は大変でした。震災の翌年から毎年、総会を兼ねた「一會えてよかった来てよかったの会」を郡山市の月光温泉で開催しています。最初の年は全戸住民の7割近くの参加があったんですよ。

◆どのようないきさつで、冊子を発行することになったのですか。編さんの中のおも聞かせください

高田勝人さん 帰りたくても帰れない、ふるさとの記録を残したいという話が出て、一昨年



井戸川さん



高田 勝人さん



高田トシ子さん



中谷さん

きながら取材し、たくさんの方々の声を掲載できるようにしてきました。

高田勝人さん 酒井は行政区がまとまっており、防災への備えや祭り、農業など、いろいろな取組が盛んでした。私も区長として、毎月『酒井ふるさと会便り』を発行し、情報公開に努めてきました。震災後も作って郵送していたんですよ。

震災直後は帰りたいと言う声も圧倒的に多かったのですが、高齢者が多いこともあり、避難先への定住も増えてきました。酒井を後世に残すには記録があれば一目瞭然。無ければ全て無になってしまうという切実な思いから、編集委員11人で取り組んできました。

井戸川さん 皆さんからお寄せいただいた文章や様々な地域活動、伝統芸能などの写真を見ると、酒井地区の良さやこれまでの歴史を再確認できるような気がします。中には60年も前の写真を送ってくださった方もいて、とてもうれしい思いで編集作業を進めることができています。

高田勝人さん 地区の皆さんには、『編集委員会だより』を通じて冊子の編集状況などを伝えて

ています。また、茨城県や仙台市、いわき市など遠方の編集委員たちとはLINEで折々の情報交換をしています。一方、会議に参加する交通費や通信費などの負担は大きいです。

伝統やいわれを掘り起こすためにお年寄りから話を聞くなど、一生懸命活動していると、関心を持ってくれる人も多いようです。若い人たちはふるさとの話を直接聞くことが少ないですから、今のうちに書き留めたいと思っています。

◆これからのふるさとへの思いなどを聞かせください

中谷さん 震災がなければ、たぶん生産組合が中心になり生産、加工、販売までを行う6次産業化で機能していたかもしれません。ただ営農ができませんので、今後は太陽光発電に変わり、新たな組織で進んで行くと思います。

高田勝人さん 震災後すぐに、町へ復興について提案書を提出したり、復興計画策定委員として発言をしたりしました。しかし、現在は皆、居を構え生活しているため、帰還する人はわずかです。私には酒井や町をどうすべきか分かりませんが、帰還困難区域として初の大規模太陽光発電所ができますので、地権者の組合が末永く地元の人たち

の絆となればよいと思いますよ。

町の復興計画にはまったく新しい発想が必要だと思いますし、一方、私たちは原発事故の計り知れない影響を多くの人たちに正確に伝えていかなければならないと思っています。

井戸川さん 帰還困難区域である酒井地区再建のための方針が何一つ示されていない中、朽ちていく家を見ながら、今後の行く末に不安を感じています。故郷に帰還できない私たちにとって、復興への対策や心の支えとなる施策が、今後、具体化していくことを望みます。

そして、この現状を風化させず、多くの方々に原発事故災害がいかに深刻かを考えてほしいと思っています。

(平成29年)の臨時総会で予算化し、編集委員会が発足しました。そして、今年3月の通常総会までに冊子を発行し、皆さんに配ることにしました。昨年4月には各隣組から編集委員を選出してもらい、本格的な活動が始まりました。

井戸川さん 冊子は180ページを超える予定で、「1. 酒井行政区のあゆみ」「2. 酒井の言い伝えと祭り」「3. ふるさと酒井への想いと原発災害を経験して」「4. 資料」の4つの章で構成されています。

特に、第3章は昨年の総会後から区民の方々に執筆をお願いし、電話や訪問をさせていただ



▲インタビュー風景



神奈川県

吉田 百花さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋

取材日：1月15日 「平成31年3月 広報なみえ掲載」

「相馬野馬追」に出たい、出なくては



◀宝物の一番旗と肩証
▼勇壮な乗馬姿の吉田さん



震災の時、小学6年生だった吉田さん。現在は、神奈川県^{でん}の大学に在学し、ご両親が福島市内で経営する和風ダイニング「きち傳」の経営をサポートしたいと勉学に励んでいます。

◆「相馬野馬追」に出たい

震災の前の年、小学5年生の時に初めて「相馬野馬追」に出ました。震災から約7年が経過した昨年は、震災後初めて浪江町で開催すると聞き、19歳の私は最後のチャンス、「出たい、出なくては」と思いました。8年前は、父の幼なじみの方から馬をお借りしましたが、今回は、大学の近くの伊勢原市にある乗馬クラブの馬をお借りしました。乗馬クラブの方には、乗馬訓練をしていただいた上に、浪江町まで馬の移動をしていただきました。本当にお世

話になりました。

甲冑師^{かぶと}だった祖父は、陣笠を作ってくれました。最初は「落馬が心配」と反対していた父も、出ることが決まると、以前開催された野馬追のビデオと一緒に見ながら、馬の扱い方を助言してくれました。私も父も野馬追が大好き。父は今も、馬装の準備などをする裏方として活躍しています。

野馬追の1日目は中央公園での出陣式の後、陣羽織姿で南相馬市の雲雀ヶ原祭場地まで練り歩き、2日目は甲冑を付けて本祭りに参加、浪江町に戻り中央公園で行われる神旗争奪戦が野馬追のハイライト。標葉郷大將の吉田栄光さんから、「19歳で最後だから頑張れ」と気合を入れられました。

◆震災で変わった生活

震災の時、私は小学6年生。新潟の親戚の所に避難した後、中学校の入学式に出させてやりたいという両親の思いから、4月には福島に戻り、福島市立信夫中学校に入学しま



▲小学5年生の時に初めて出陣

した。その後、第一中学校に転校、郡山での高校生時代も含めてハンドボールに熱中し、県代表として団体にも出場しました。残念ながら高校卒業前に膝を痛め、今はやっています。震災前、両親は浪江町役場近くでホテル「行人荘」を経営し、多くの人たちに利用していただいていた。震災後しばらくして、両親は福島市内に、和風ダイニング「きち傳」を開業しました。昼は仕出し弁当、夜は旬の食材を生かした和食ダイニングの店として人気を得ています。母は発想力に富んでいて、新しい料理を考え出すのももちろん、お菓子作りにも取り組んでいます。母の発想力と父の決断力で、現在があるのだと思います。

◆「きち傳」をみんなの店に

姉は、東京で働いています。が、姉も私も将来は、福島に戻って両親のお店を手伝いたいと思っています。そのために、経営や調理に関する資格などを記載した「やることリスト」を作成、大学在学中にできるだけ資格を取得したいと思っています。「きち傳」にたくさんのお客様を迎えることができるように、家族4人で力を合わせて頑張っていけたらと思います。



福島県

石川 史織さん(樋渡)

取材者：バーグ・プラン研究室 深田

取材日：平成30年12月29日 「平成31年3月 広報なみえ掲載」

「ふるさと復興応援楽団NEO」の第2回吹奏楽演奏会を浪江町地域スポーツセンターで開催します。ぜひ、聴きにきてください!



▲来場を呼び掛ける石川さん

建築デザイナーを目指して大学の建築学科に通いながら、仲間たちとふるさとを元気づけるため吹奏楽団を結成し、今後も浪江町で演奏会を続けて行きたいと頑張る石川さん。現在の活動や将来の夢、浪江町の復興への想いなどについてお伺いしました。

◆浪江での吹奏楽団演奏会

平成30年3月、仲間と結成した「ふるさと復興応援楽団NEO」の吹奏楽団演奏会を、浪江町地域スポーツセンターで開催しました。会場には、私たちの予想を大きく上回る70人以上の方が詰め掛けてくださり、中には、福島市など遠くから来てくださった方もいました。

浪江で演奏会をやるうと思っしたのは、福島の高校時代の吹奏楽部の顧問に、浪江高校の先生が赴任して来られたのがきっかけです。「仲間と共に浪江町で演奏会を開いて、住民の方々を元気づけたい」と先生に相談したのが始まりでした。楽団名の「NEO」は、Name of the「NJ」Energy of「E」、Organization of「O」であり、復興を応援し、皆さまの力となる組織になりたいという意味です。

◆福島市で家族と生活

震災前は、父母と姉、祖母と私の6人家族で、樋渡地区に住んでいました。震災後、津島に2、3泊した後、会津若松市東山温泉、茨城県の親戚宅、福島市のアパートへと避難、現在は両親が福島市に購入した住宅に家族と暮らしています。避難した当時、私は小学6年生で不安な毎日でしたが、家族がいっしょだったことがとても救いでした。しかし、80歳を越えていた祖父母は他界してしまいました。

◆私の夢は建築デザイナー

私の夢は建築デザイナーです。建物や住宅の間取り、色合いなどをデザインし、設計することに興味があったので、高校は工業高校の建築科で学び、現在は、大学で建築学科を専攻しています。今年から就職活動が始まるのですが、福島県内に就職して、地元浪江町や福島県のために活躍したいと思っています。

◆浪江の思い出・風景

浪江では、田んぼや畑に囲まれた自宅周辺で鬼ごっこや缶蹴りをして遊んだことや、町内で行われていた野馬追の時に見た馬がカッコよかったことを思い出します。山と海があった空気もいいのが浪江町の良さでした。行ってみたい場所は、祖母のお姉さんの家があった小丸の焼築です。周りに家も少ない山

の中の集落ですが、お盆や正月になると、親戚一同が集まっにぎやかでした。今は帰還困難区域に指定されているので帰ることができません。95歳になる祖母のお姉さんは今も健在ですが、生きているうちに生まれ育った我が家に帰りたいと言っています。

◆若者を呼び込むまちづくり

町は除染も進み、帰れる地区も多くなりましたが、戻ってくる住民はまだ少なく、高齢の方が多いと聞きます。浪江の自然環境や、住民の人柄などを生かして、広く移住をPRしてはどうでしょうか。また、今まであった祭りやイベントも復活してきているのはいいんですが、若い人を呼び込むためにはこれに、新しいもの・プラスαが必要ですし、みんなが主役になれる、外部の人も入ってもらえるような参加型の企画・イベントができればいいと思います。

◆第2回演奏会に向け準備中

現在は、3月30日(土)、浪江町地域スポーツセンターで開催する第2回吹奏楽団演奏会(開場13時、開演13時30分)に向けて準備中です。皆さん、ぜひ、聴きにきてください。

また、私たち吹奏楽団の浪江町の演奏会はこちらから続けていきたいので、一緒に演奏してくれる方を募集しています。どうぞお気軽にご連絡ください。